佐野遺跡XI

――上・下水道工事に伴う発掘調査報告書――

2006年３月

山ノ内町教育委員会

佐野遺跡XI

――上・下水道工事に伴う発掘調査報告書――

2006年３月

山ノ内町教育委員会

序　文

佐野遺跡は、中部山地における数少ない縄文時代晩期の遺跡で、東北地方に核のある、亀ヶ岡式文化圏などの影響のみられる遺物が豊富に出土し、昭和33年に初めて発掘調査が実施され、昭和51年には国の史跡に指定されました。

過去に10回の発掘調査を実施し、多数の遺物が発見され、縄文晩期の文化系統や縄文人の交流を解明する重要な資料が確認されております。

今回、町の上下水道工事実施に伴い平成17年７月から12月にかけて調査を実施したものであります。今回も多数の遺物が発掘され、重要な遺跡であることが再確認されました。

この発掘調査に暑い中、ご指導をいただきました長野県教育委員会の西山克己氏、長野県埋蔵文化財センターの綿田弘実氏、ご指導及び調査報告書をまとめていただきました檀原長則調査員をはじめ、整理作業にご協力いただきました㈳中野広域シルバー人材センターの皆様、関係者の皆様に深甚なる感謝を申し上げ、序文といたします。

平成18年３月

山ノ内町教育委員会
教育長　中 山　弘 和

例　言

1　本書は山ノ内町大字佐野に所在する佐野遺跡の発掘遺物第11次調査報告書である。

2　発掘調査は平成17年７月19日から12月６日にわたって実施した。

3　本調査は県道中野～角間線・宮村～湯田中停車場線の上・下水道工事に伴い、山ノ内町教育委員会が実施した。

4　発掘調査は、重機をもちいて幅約80センチ、深さ１メートル以上を掘削して行った。交通の支障、調査員の安全などのため、充分な調査が不可能で、遺物採集の性格が強かった。

5　出土遺物の注記は、従来の形式を継承し「ＹＳ11次・調査地点名」とした。

6　本報告の執筆は檀原長則、竹田保夫が行った。

7　石器実測・トレースは尾澤みつ子、竹田保夫、写真撮影は竹田保夫が担当した。

8　長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課の西山克己氏と長野県埋蔵文化財センターの綿田弘実氏に発掘調査のご指導をいただいた。また、中野市歴史民俗資料館の中島庄一氏には遺物について助言をいただいた。

9　本遺跡の出土遺物及び遺構図・写真等の記録資料は、山ノ内町教育委員会が保管している。

目　次

序文
山ノ内町教育委員会　教育長　中山弘和
例言

第Ⅰ章　経　　過……1
第1節　発掘調査前の経過……1
1　経　　過……1
2　調査員等の構成……1
第2節　発掘調査の経過……1
1　発掘調査日誌……1
2　整理作業……2
3　今回の遺跡調査について……2
4　佐野遺跡の今後の調査に向けて……3

第Ⅱ章　遺　　跡……4
第1節　遺跡の位置と立地……4
1　位置と気候……4
2　立　　地……8
第2節　地層の状態……8
1　地層の状況と基本層序……8
第3節　佐野遺跡周辺の遺跡……8
1　山ノ内町佐野の遺跡……8
2　山ノ内町佐野の弥生・古代の遺跡と遺物…9
3　山ノ内町佐野の中世・近世の歴史……9
第4節　佐野式土器の遺跡……10
1　佐野遺跡の調査年表……10
2　山ノ内町の佐野式土器出土遺跡……11
3　北信地方の縄文晩期の遺跡……11

第Ⅲ章　遺　　物……13
第1節　縄文時代……13
1　土　　器……13
2　石　　器……21
3　近在から表採された遺物……28
第2節　中　　世……28
1　遺　　物……28
第Ⅳ章　結　　び……30

挿図版目次

第1図　遺跡の位置（1）……4
第2図　遺跡の位置（2）……5
第3図　遺跡の範囲……6
第4図　調査及び遺物出土範囲……7
第5図　晩期縄文土器（1）……22
第6図　晩期縄文土器（2）……23
第7図　晩期縄文土器（3）……24
第8図　晩期縄文土器（4）……25
第9図　晩期縄文土器（5）……26
第10図　石　　器……27
第11図　中世の遺物……27
第12図　近在及び過去の表採遺物……27

挿表目次

第1表　北信地方の佐野式土器の出土地名表…12
第2表　底部圧痕分類表……20
第3表　遺物の出土グリット表……29

挿入写真図版

佐野遺跡から既出された土器……12

写真図版目次

図版1　1．土器（1）
2．土器（2）
図版2　1．土器（3）
2．土器（4）
図版3　1．土器（5）
2．土器（6）
図版4　1．土器（7）
2．土器（8）
図版5　1．石　　器
2．中世の遺物18と近在及び過去の表採遺物

第Ⅰ章　経　　過

第１節 発掘調査前の経過

１　経　　過

平成16年12月８日　山ノ内町水道課から佐野遺跡内宅地等及び佐野遺跡内県道において上下水道工事に伴う、史跡現状変更許可申請及び埋蔵文化財発掘の通知があり、提出したところ包蔵地については平成16年12月28日長野県教育委員会から、史跡部分については平成17年４月８日文化庁次長から発掘調査を実施するよう通知があった。

平成17年１月17日　山ノ内町の笠峯会から引湯管布設替に伴う埋蔵文化財発掘の届出があり、平成17年１月21日長野県教育委員会から発掘調査を実施するよう通知があった。

平成17年１月27日　発掘調査方法について三者協議（県教委、町水道課、町教委）を行う。その結果、発掘調査は平成17年７月から９月末となった。

平成17年２月23日　山ノ内町水道課から上水道管布設に伴う埋蔵文化財発掘の通知を、長野県教育委員会に提出したところ、平成17年２月28日から発掘調査を実施するよう通知があった。

平成17年10月21日　菅沼さん・藤澤さんから史跡内の現状変更許可申請があり、提出したところ平成17年11月28日文化庁次長から発掘調査を実施するよう通知があった。

２　調査員等の構成

調査責任者　中山　弘和　山ノ内町教育委員会教育長

調査員　檀原　長則　日本考古学協会会員、山ノ内町文化財保護審議会委員

調査指導者　西山　克己　長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課

綿田　弘実　長野県埋蔵文化財センター

調査補助員

松本　正　山ノ内町教育委員会生涯学習グループ

整理作業

竹田　保夫、橋内　賢裕、尾澤みつ子

関　武、竹田　磨生、石島　薫

協　　力

㈳中野広域シルバー人材センター

事　務　局

山ノ内町教育委員会事務局

内田　啓二　教育部長

成沢　満　生涯学習グループリーダー

松本　正　生涯学習グループ

第２節　発掘調査の経過

１　発掘調査日誌

７月19日（火）　県教育委員会事務局　西山氏、建設水道部担当、業者、町教育委員会事務局とで現場にて調査方法の打合せを行う。引き続き工事箇所を掘削したところ、調査地点（以下略）Ａ１－２（マンホール部分）の攪乱層から、中世以降のものと思われる土器片１点出土する。Ａ２－３も調査。

７月21日（木）　西山氏立会い。Ａ４－５の１層から、土器片と石器が１つずつ出土する。

Ａ２とＡ４の間について、どこまで攪乱が続くか記録を取るように西山氏から指示あり。土層が生きていれば徐々に掘って調査し、攪乱層なら掘削とのこと。Ａ６－７も調査。

７月22日（金）、25日（月）から28日（木）　町教育委員会事務局のみ立会い。Ａ３－４調査したところ、Ａ２からＡ４方向へ６ｍまでが攪乱状態。Ａ８からＡ14まで調査。

７月29日（金）、８月１日（月）　西山氏立会い。Ａ15からＡ21、Ｂ１からＢ７まで調査。Ｂ１－２の１層から土器片５点・石器３点、Ｂ３－４の２層から土器片５点、Ｂ６－７の２層から土器片13点・石器７点出土する。

８月２日（火）から４日（木）　檀原調査員立会い。Ｂ９からＢ26、Ａ22－23調査。Ｂ９－10の１層から石斧１点、Ｂ17－18の１層から土器片１点、Ｂ19－20の１層から土器片21点、Ｂ20－21の１層から土器片52点・石器２点、Ｂ22－23の１層から土器片11点・石器１点、Ｂ23－24の１層から土器片３点出土する。

８月５日（金）　西山氏立会い。Ａ24－25、Ａ30－31調査。

８月８日（月）、17日（水）から19日（金）　町教育委員会事務局のみ立会い。A26からA31、Ｃ１からC12調査。

８月23日（火）　西山氏、綿田氏（長野県埋蔵文化財センター）立会い。Ｄ１－２、D21－39、D22－41調査。D21－38の黒土層から土器片１点出土。D38－39、D40－41を含む大日堂地籍の包含層は撹乱されていた。

８月24日（水）、25日（木）　町教育委員会事務局のみ立会い。Ｄ３から５調査。

８月26日（金）、９月１日（木）　西山氏立会い。Ｄ４から８、Ｄ９－10、D28－29、D30－31調査。Ｄ９－10の地山砂礫層から木片１点出土。D30－31（鈴木宅）は１層表土、２層旧水田床土、３層砂礫、４層茶褐色土（包含層）、５層黒褐色土・５㎝大礫多く含む（包含層）、６層青色砂礫層となっており、４層から土器片４点、５層から土器片３点・剥片１点、６層から土器片９点・剥片４点出土。

９月８日（木）、12日（月）、13日（火）　町教育委員会事務局のみ立会い。Ｄ８－９、D10から14調査。D11－12の黒土層から土器片１点出土。D13－14の黒土層から土器片１点出土。

９月14日（水）　西山氏立会い。D15－16の黒土層から土器片６点出土。D34－35（宮沢宅）の撹乱から土器片32点、黒色シルト層・茶褐色シルト層から土器片85点・石器３点・黒耀石１点出土。

９月15日（木）　町教育委員会事務局のみ立会い。D17－18の黒土層から土器片26点出土。D18－19の黒土層から土器片10点出土。D36－37（山本宅）の黒土層から土器片１点出土。

９月16日（金）　西山氏立会い。D19－20の黒褐色土層から土器片47点・石器23点、茶褐色土層から石器５点出土。D44－45（藤本家）の黒褐色土層から土器片153点・石器79点出土。

９月21日（水）　綿田氏立会い。Ｅ１－２調査。

９月22日（木）、26日（月）　町教育委員会事務局のみ立会い。Ｅ３－４、D20から22調査。D20－21黒土層から土器片241点・石器６点出土。D21－22黒土層から土器片91点・石器７点・剥片１点出土。

９月27日（火）　西山氏立会い。D40－41の黒土層から土器片34点・石器５点・獣骨のかけら７点、茶褐色土層から土器片２点・石器２点・剥片１点出土。

９月28日（水）　町教育委員会事務局のみ立会い。D22－23の黒土層から土器片41点・石器４点出土。D23－24の黒褐色土層から土器片14点出土。

９月29日（木）　西山氏立会い。D24－25の黒褐色土層から土器片３点出土。

10月３日（月）、５日（水）から７日（金）、11日（火）、14日（金）、21日（金）　町教育委員会事務局のみ立会い。D26－27、Ｆ１から13、B27から30、A32から37調査。

12月６日（火）　西山氏立会い。藤澤宅内配管工事に伴いD45－46（下水道工事部分）を調査したところ、黒褐色層から土器片69点・石器５点、茶褐色土層から土器片３点出土。隣の上水道工事分については、深さが40㎝のため、遺物包含層に達しなかった。

2　整理作業

10月27日（木）、檀原、竹田、シルバー人材センター事務局、町教育委員会事務局とで整理作業について打合せを行う。シルバー人材センターに整理作業から報告書作成まで依頼する。

土器洗いを山ノ内町文化センターにおいて11月14日から15日まで行う。

整理作業は中野市中央の中野広域シルバー人材センター事務所３階を作業所として、注記を11月22日から12月２日にかけて行い、その後、原稿執筆、遺物実測、遺物修復、トレースはそれぞれ平行して行い２月15日に終了する。

印刷は２月16日に入稿し、以降は校正と平行して遺物及び記録資料の残務整理を行う。

遺物・記録資料の全ては整理作業後、山ノ内町教育委員会に移管した。

3　今回の遺跡調査について

今回の調査は、遺跡内の道路及び宅地内の上・下水道管敷設に伴うもので、全面発掘による学術的な調査にくらべて、大きな制約をうけている。

まず掘削幅が70㌢前後と狭く、深さも遺物検出面が１㍍以上となる場合があり、遺物包含層を面的に的確にとらえるには、豊富な経験が必要であった。

さらに油圧シャベルによる掘削と同時進行のため、施工業者との連携、理解を得ることも必要であった。

また、速やかに復元を要する道路交通上の問題もあり、迅速に記録保存する必要があった。

それに加えて崩落による事故防止が何より大切で、調査面積の制約から多くの人員を動員するこ

ともできず、十分な調査は不可能であった。
以上のように残念ながら遺物の収集的な面が強かったが、遺跡内の道路の延長が、広範囲にわたる掘削のため、遺物分布調査（遺跡範囲確認調査）的な調査となり、遺跡の時期別の土器が少量ずつであったが、検出されたことが特筆される。

4　佐野遺跡の今後の調査にむけて

佐野遺跡には近代に入って穂波地区（村）の交通上から中心地のため、小学校、農協、商店、個人住宅などの建設が行われてきた。

さいわい第1・2次発掘調査（1958／9）によって基本的な遺跡の性格が、永峯光一氏らによって究明され、その研究の成果がまとめられて、1967年『報告書』が刊行された。

しかし先述の事情のため、その後の調査は、面積的に制約をうけたものとなり、遺跡の全体像をつかめる段階に至っていない。

思いつくままにその課題を列挙する

1）炉址が第2次発掘調査で検出されているが、住居址が明確に確認されていない。遺跡には石礫が多く、ローム層が存在しない。そして黒色土の層準が明確でないため、確認は困難を伴う。

検出された集石址の性格がなんであるか、信仰・呪術からの検討のみではなく、地上住居の柱の補強の跡などの多面的な検討が必要と思われる。

2）墓址には共同墓地、個々の家族墓、個人墓などがあり、土坑墓・組石墓・土器棺墓などの構造がみられる。埋甕が幼児または2次葬としたら、第2、7次調査などで出土している。しかし明確な墓壙を掘らなかった可能性もあるが、土坑墓・組石墓などの、単独または集団墓は、現在までにまだ報告されていない。

組石墓は岡ノ峯遺跡（野沢温泉村）、宮崎遺跡（長野市若穂）などの晩期の遺跡で検出されている。佐野遺跡でも十分可能性が考慮される。（従来「石棺墓」などと表記されてきたが、今回は「組石墓」の表現にあらためた。）

集石が一定のまとまりを持つ『佐野』図版4、A―5区集石址や、第7次調査での円形列状の集石、中央南付近の集石などは墓壙を形成している疑いがあるが、明確になっていない。今後に残された問題である。

3）立柱遺構　現在では諏訪神社の立柱（御柱）が有名だが、縄文時代にも巨木を立てる立柱の風習があり、その遺構が検出されている。それは前期後半に始まり、晩期中葉に盛行し、後葉まで続くとされている（植田文雄「立柱祭祀の史的研究」―立柱遺構と神樹信仰の淵源をさぐる―『日本考古学』第19号2005）。

この立柱遺構は石川県の真脇遺跡など北陸地方に多く発見されており、地理的に近いこの地方にも十分検出される可能性がある。

4）その他　佐野遺跡の住民の生業は、狩猟と自然の食物の採集などに重点をおいたものとみられる。佐野遺跡は平地の拠点集落とみられるが、湯倉洞窟（高山村）でも佐野式の土器が検出されている（高山村教育委員会『湯倉洞窟』2001）。このような山中を渡り歩き狩猟・採集を業とする人々と、どのような交渉があったか、究明したい問題である。

5）条痕文の土器は、第8次調査で出土している（田川幸生1989）。条痕の土器は亀ヶ岡遺跡からも出土している（三田史学会『亀ヶ岡遺跡』－青森県亀ヶ岡低地性遺跡の研究―復刻版1984）。条痕文土器は、土器製作の技法上の問題とも一面からはみられるのである。県内の氷遺跡（小諸市）の晩期終末の条痕文土器と、佐野遺跡のものが直接結びつくか疑問もあった。

しかし今回は、浮線網状文の土器片が2片検出され、資料提示することができた。もちろん新潟方面との関連や、千網式土器との関係も考慮に入れなければならないが、氷Ⅰ式との共通した文様の土器がみられたことは、浮線網状文の土器は、条痕文の土器とはまた違った意味の検出とみなければならない。

この土器の時期は、西日本で弥生式の時代に入っている。この地方の弥生時代の開始にも大きくかかわってくる問題である。

第Ⅱ章　遺　　跡

第１節　遺跡の位置と立地

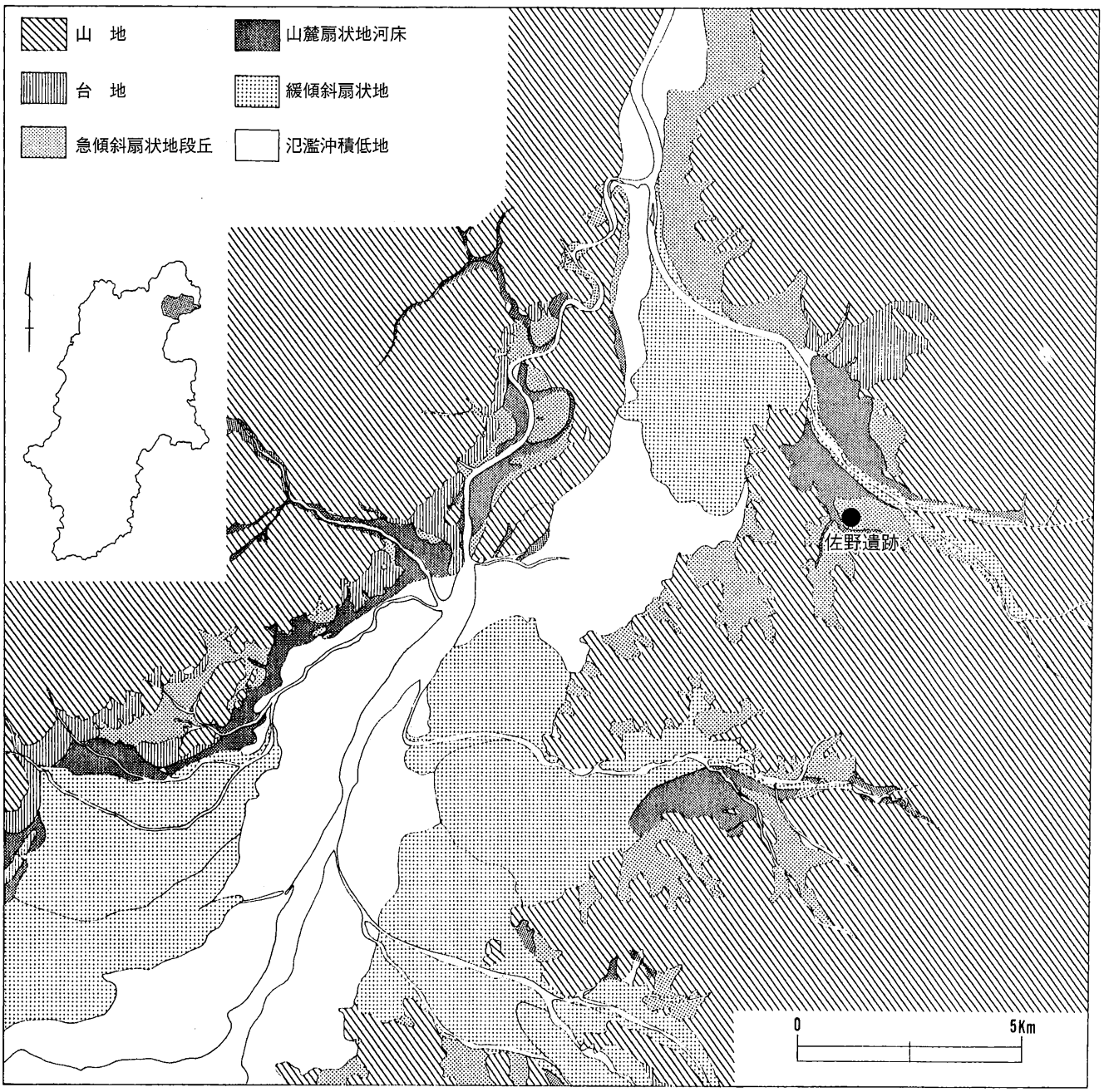
１　位置と気候

山ノ内町は長野県の北東部(北緯36度39分～492分、東経138度23分～392分）に位置している。

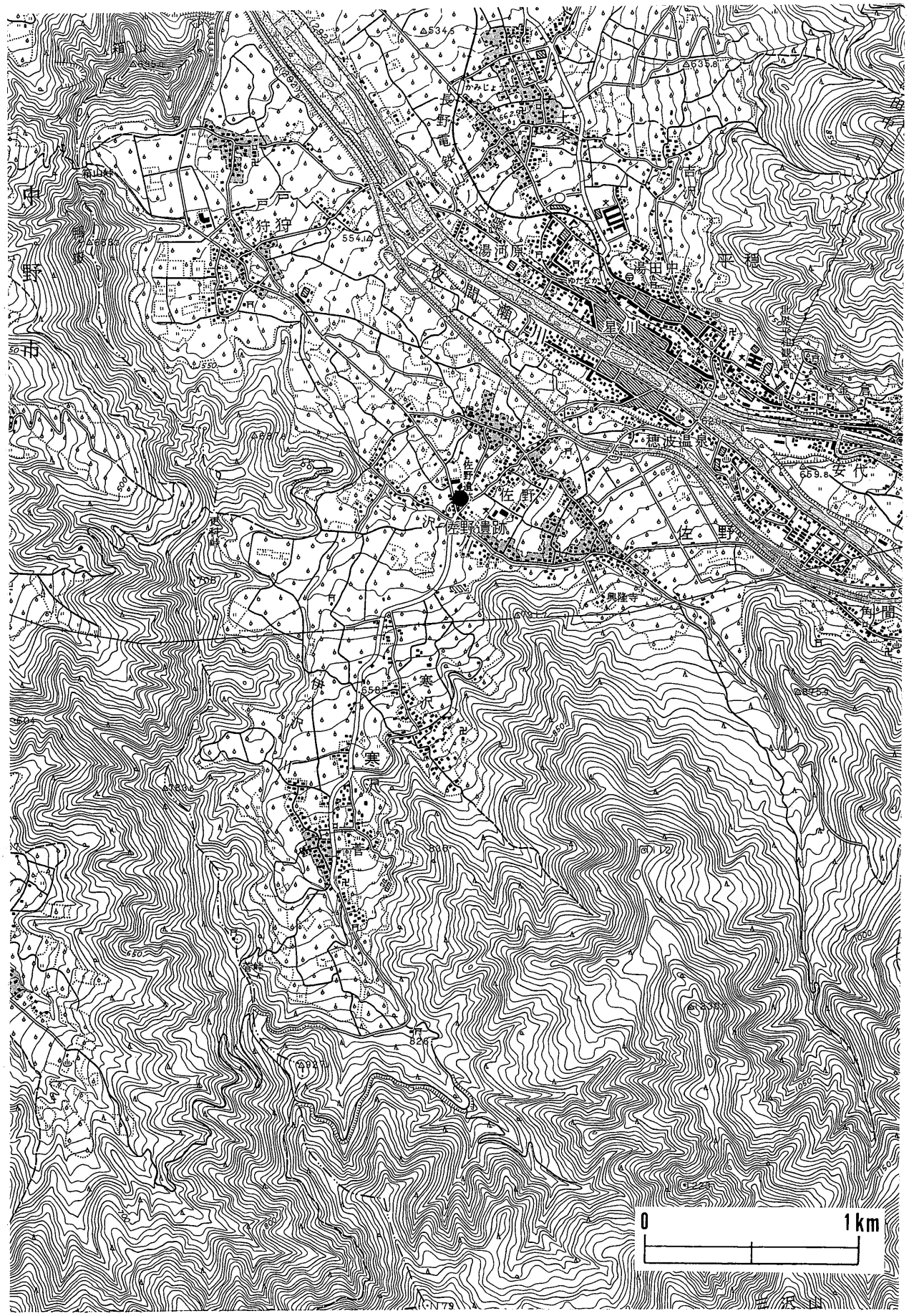
佐野遺跡は山ノ内町佐野字畑中1175(遺跡公園）にあり、標高600m前後に存在している。遺跡は、字畑中４筆、谷地24筆の範囲の土地、合計面積約7000m²である。

遺跡は東高西低の山ノ内盆地(標高424～750m）の南部にある。盆地の中央に夜間瀬川が東西に流れ、盆地を二分している。その支流の伊沢川は上流で、内角間川（北三沢川）と合流している。この川が遺跡の南を流れ、川に沿って遺跡が展開している。内角間川は、佐野集落の上流で中性（PH6,8）を示し、飲料水に用いられている。

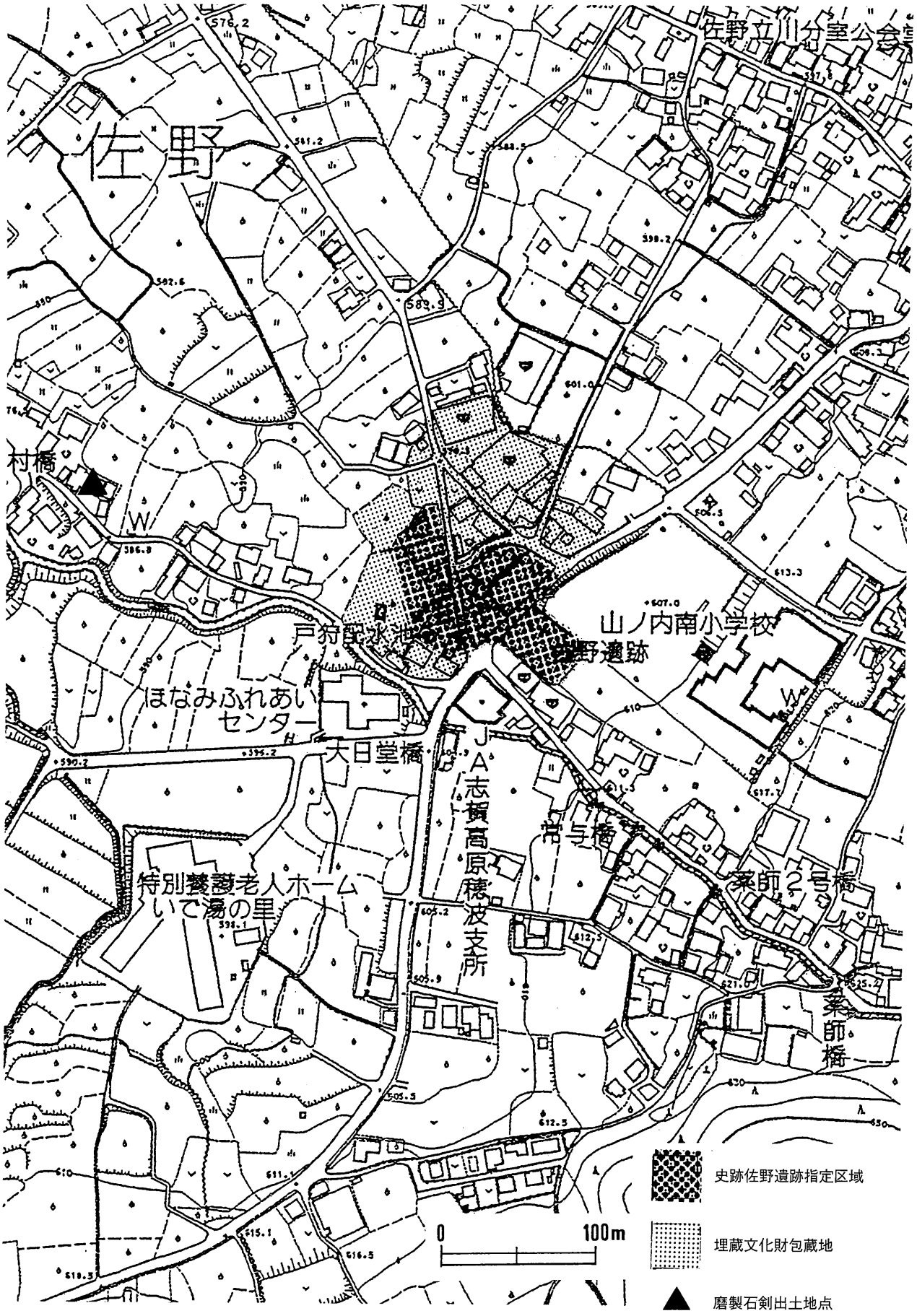
山ノ内町は三国山脈に連なる上信国境の山々の



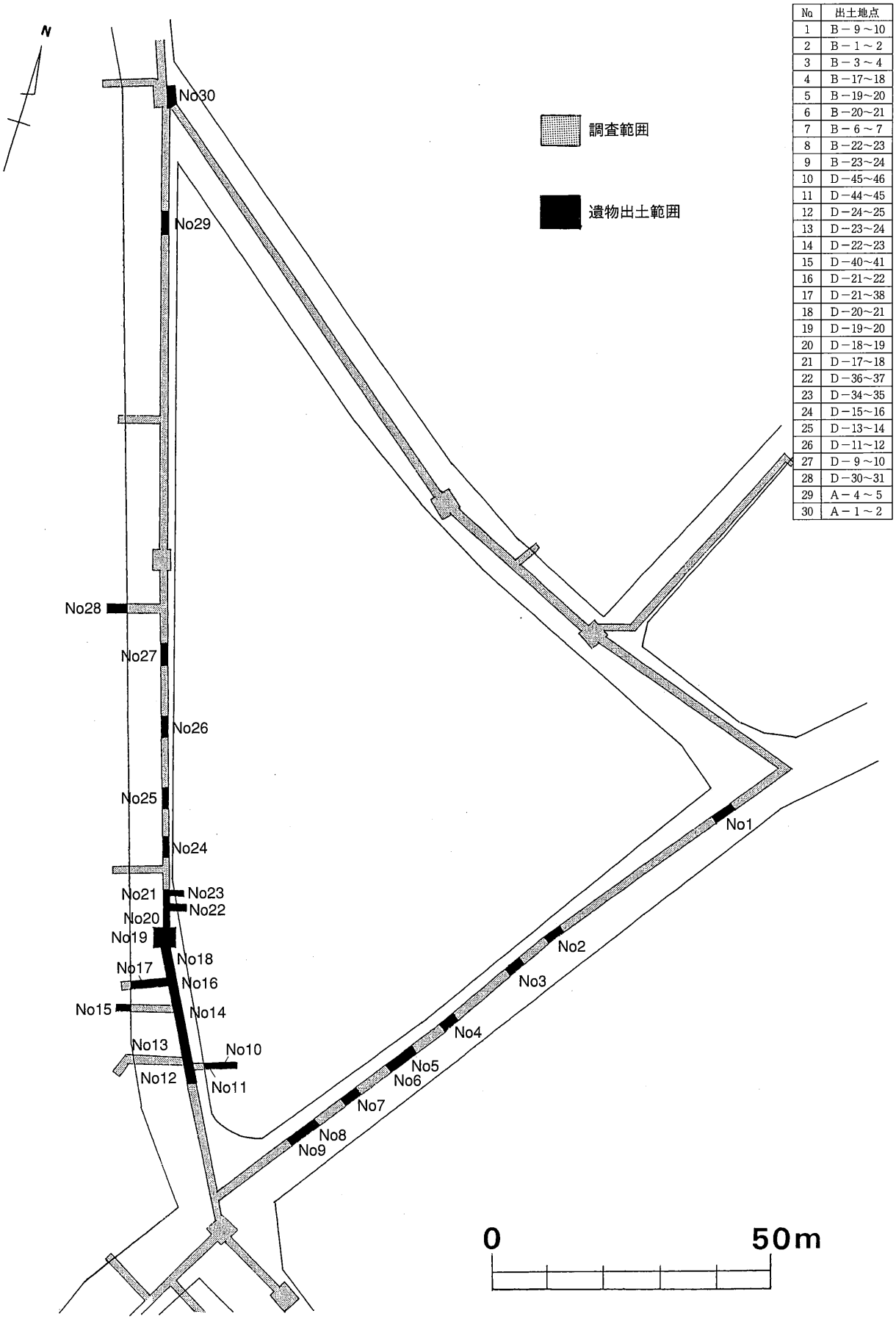
第１図　遺跡の位置(1)



第２図　遺跡の位置(2)


佐野
佐野立川分室公会堂
村橋
戸狩賀水池
山ノ内南小学校
佐野遺跡
ほなみふれあいセンター
大日堂橋
JA志賀高原穂波支所
常与橋
特別養護老人ホーム いで湯の里
桑師2号橋
桑師橋
史跡佐野遺跡指定区域
埋蔵文化財包蔵地
磨製石剣出土地点
0
100m

第3図　遺跡の範囲



No	出土地点
1	B－9～10
2	B－1～2
3	B－3～4
4	B－17～18
5	B－19～20
6	B－20～21
7	B－6～7
8	B－22～23
9	B－23～24
10	D－45～46
11	D－44～45
12	D－24～25
13	D－23～24
14	D－22～23
15	D－40～41
16	D－21～22
17	D－21～38
18	D－20～21
19	D－19～20
20	D－18～19
21	D－17～18
22	D－36～37
23	D－34～35
24	D－15～16
25	D－13～14
26	D－11～12
27	D－9～10
28	D－30～31
29	A－4～5
30	A－1～2

第4図　調査及び遺物出土範囲

北西側にある。このため冬季は北陸型の気候で、北西季節風の影響を受け、降雪が多く気温も低い。１月の佐野遺跡付近の日平均気温は— 1,7度と推定される。最高気温は８月で日平均気温約29度と、昼夜の温度差が大きい。

降雪量は２月が最大を示し、山ノ内盆地では１ｍを越すことはまれであるが、志賀高原の丸池では、２ｍを越すことは珍しくない。初雪は11月下旬ごろ、終雪は４月上旬ころであり、３ケ月あまりの降雪期間がある。なお、現在より寒冷だったと言われる縄文晩期では、冷涼な期間が長かったとみられる。

2　立　　地

佐野遺跡の南方は三沢山に向かって山麓の傾斜地が開けている。東は三国山脈に連なる志賀高原の広大なる山岳地帯で、遺跡の近くまで山が迫っている。

夜間瀬川の支流伊沢川は、上流の宮地籍で合流し、南からくる伊沢川の本流は、寒沢地籍では河岸段丘がみられ、その上流は三沢川とも呼ばれている。遺跡の西方で東から直角に合流する川は、北の三沢川（内角間川）と呼ばれている。佐野の扇状地を形成した主な河川である。両三沢川とも源流は三沢山（1504,6m）である。

佐野遺跡から北に１ｋｍあまりで、夜間瀬川に達するが、ここでの段丘の高さは10～15mである。遺跡付近の傾斜は250mで、18mの落差があり、勾配はややきつい方である。

佐野遺跡の下方には湧水地帯があり、佐野扇状地の下方では夜間瀬川の段丘が消滅し、同川の氾濫原となっている。

遺跡を巡る交通路は、東西に県道中野～角間線、南北に県道宮村（高山村）～湯田中停車場線が遺跡内で交差している。また、遺跡近くで更科峠にいたる街道も分岐しており、中野市南部に至る。

遺跡の東方は夜間瀬川の上流の角間川に至り、志賀高原方面に通じている。

なお、地名の「佐野」は「狭野（さの・せまい野)」からきているとみられる。

第２節　地層の状態

1　地層の状況と基本層序

山ノ内盆地の地形は高位より佐野面、湯田中面、夜間瀬川面で形成されている。佐野遺跡は佐野面にあり、この面は更新世の時代の堆積物によって形成された洪積台地である。

この佐野面は夜間瀬川の対岸の上林、渋の上段などにも分布している。この面は原初に山ノ内盆地を形成した面であり、現在、夜間瀬川が佐野面にたいし下刻作用を行なっている。

この佐野面は角間川・横湯川との支流によってつくられた複合扇状地で、砂礫層からなっている。この層には細砂または粘土が挟まれた層がみられる。礫は主に玢岩（ひんがん)、黒色緻密な安山岩の亜角礫、亜円礫で佐野遺跡付近では最大径50cm以下である（下水道工事の所見)。

したがってこの佐野面には火山噴出物に由来するローム層はみられない。また、佐野面の下部の基盤岩は玢岩で、山ノ内町では温泉源の岩である。(以上文献『山ノ内町誌』ほか)。

佐野遺跡の遺物包含層は、礫を含んだ黒色土である。黒色土は火山灰を母材として、プラントオパールに富むススキ・ササなどのイネ科の植物が腐食したもの、さらに遺跡地では生物・植物の遺体など、人為的に集積されたものも合わさり、黒色化が増大するとみられる。

この黒色土の基底の年代は6000年Ｂ・Ｄ前後を示すと言われている。

今回の調査は県道を掘削するもので、通常の発掘調査と違い、大きな制約を受けている。遺跡公園の西方№6（Ｂ－20・21）の地層をみると、舗装厚さ10cm、路盤材（切り込み）40cm、礫の多い層50cm、礫の少ない黒色土層（遺物包含層）10cm内外で、以下砂礫層となっている。

第３節　佐野遺跡周辺の遺跡

1　山ノ内町佐野の遺跡

佐野遺跡を除いた佐野地籍の遺跡は、以下の通

りである。佐野遺跡のほかは点として把握されている。

上佐野遺跡　夜間瀬川左岸の佐野扇状地の標高700mの内角間川の北、字山崎2, 801の小宮氏宅と、隣の中島氏宅の周辺が遺跡である。縄文早期後半の細久保式期のものである。土器片の全面に楕円押型文が施されている。
ほかに縄文中期前葉の沈線による、区画内に縄文が施された深沢式（仮称）段階の土器と、磨製石斧、打製石斧（土堀具）、平安時代の黒色土器などが発見されている（『佐野の歴史』・『上林中道南遺跡Ⅴ』。

鎧堂遺跡　字北原に所在し、平安時代の須恵器・土師器が発見されている。

前林遺跡　字前林の内角間川の南に所在し、縄文中期の土器片、打製石斧などが発見されている。さらに平安時代の須恵器の壷と甕、土師器の坏、中世の珠洲焼の甕の破片などが発見されている。

堀の内遺跡　字北田に所在し、黒色土器が発見されている。

佐野境遺跡　字境に所在し、平安時代の須恵器・土師器が発見されている。
佐野遺跡の隣接地からは、昭和45年（1970）にＪＡ志賀高原農協穂波給油所建設のため掘削したところ縄文中期の厚手の土器片が検出された。

2　山ノ内町佐野の弥生・古代の遺跡と遺物

佐野地籍では現在までに弥生・古墳時代の遺構・遺物は検出されていない。しかし、夜間瀬川対岸の湯田中には古墳時代後期の横穴式古墳、湯宮古墳があり、2003年山ノ内町教育委員会で清掃作業を行った。遺物は発見できなかったが、かなり特異な形状を持つ石室と判明した（未報告）。

佐野の対岸の金倉には大治５年（1130）の弥勒石仏があり、金倉井牧時代の遺産とみられている。

佐野の興隆寺本尊の阿弥陀如来坐像（県宝）は、桂材の一本作りに近い木寄せの作りで、彫刻は直線的に深く、張り出した腹部などに地方色がみられ、伝来が明らかではないが、平安時代後期の作とみられている。このようにこの地域にも古代の文化財が残されている。

佐野は平安時代には高井郡５郷の一つ日野郷（ひむのごう）に含まれていたと推定されている。

3　山ノ内町佐野の中世・近世の歴史

嘉暦４年（1329）の諏訪上社の「大宮御造営目録」によれば、玉垣５間を須毛、戸狩両郷で寄進している。この須毛郷の本拠地は、更科峠よりの内ノ町にあったと思われるが、この須毛郷には、現在の大字寒沢、佐野が含まれているとみられる。

南北朝時代になるとこの地は高梨氏の一族小島氏の領有するところとなった。小島氏は寛正４年（1463）から文明18年（1486）の23年間に６回にわたって諏訪の諏訪社造営の頭役（とうやく）を務めている。

永正10年（1513）越後の守護上杉定実と守護代長尾（後に上杉氏）為景の不和に乗じて起こった永正の乱には、為景方の高梨氏の反対党、中野・夜交・小島氏等が高梨氏の重臣草間氏によって機先を制せられ、山ぶみされて捕らえられ、小島・夜交氏は極刑に処せられた。

これによって小島氏宗家は滅亡したといわれている。この小島氏の山城は、字竹ノ越（館の越）の更科峠の北方の山頂にある。主郭は標高710m付近に築かれている。

居館は字堀の内（寒沢）にあり、伊沢川と直角に合流する円生里川の段丘上にある。

先の永正の乱で小島氏宗家は滅びたが、佐野の分流は、難を逃れたとみられる。永禄年間（1558～67）になると山ノ内地方は、甲斐武田氏の旗下となった。佐野の初見は天正７年（1579）の小野社（辰野・塩尻市）の造営負担を命じた武田勝頼の朱印状である。この地方の佐野ほか17郷が記され、佐野は集落としての開拓が進んだ傍証である。

天正10年（1582）には織田氏の進攻、武田氏の滅亡、織田信長の死亡、上杉氏の領有と支配者が交替した。

上杉氏旗下の佐野の小島内膳昌吉は、字宮下に諏訪社を造営した。この社は現在の佐野神社に、

明治40年区内の神社の合併に際して移転された。昭和30年（1950）国の重要文化財に指定されている。向拝実肘木（ひじき）上面の墨書によると、天正20年（文禄元年・1592）に上州草津の工匠宮崎木工丞によって建てられた。

建物は一間社流造、栃茸で昭和50年（1970）解体修理が行われている。当初材に台鉋が使用され、化粧材はベンガラ・ニス・スミが塗られ、柱と長押しの金具も塗装で表している。柱の黒塗りも漆塗りの建物がすでにあり、それに習ったものとみられている。この社殿は桃山時代以後、寺社の装飾化が進む中で、その前段階の過程を示すものとして注目されている。

慶長３年（1598）領主の上杉氏は、会津へ移封となった。しかし、上杉家中の小島氏はそれに従ったか、は不明である。(『佐野の歴史』103ページ)。慶長３年10月の上杉景勝朱印の「会津番帳」に名が見えず、文禄３年（1594）９月の「文禄三年定納員数目録」にも知行高と名前がみられない。

慶長５年（1600）の関ヶ原の戦い以後は、徳川氏の天下となり、領主の交替がはげしかったが、元和元年（1615）真田信之が松代城主となり、沓野・田中・佐野は真田領となり、幕末まで継続した（『山ノ内町誌』『佐野の歴史』『長野県史・美術建築資料編』)。

第４節　佐野式土器の遺跡

１　佐野遺跡の調査年表

昭和６年（1931）佐野遺跡に隣接する穂波小学校教師だった神田五六氏によって、遺跡の遺物採集が始められた。

昭和７年、八幡一郎氏が「信濃国下高井郡佐野の土器」の論文を発表。その後、全国の縄文土器の編年大綱を確立された山内清男氏によって長野県の縄文晩期の代表遺跡とされた。

昭和33年・34年（1958・９)、国学院大学の永峯光一氏を団長として、現史跡公園の発掘調査が行われ、多くの遺物と遺構が発見された。

昭和42年（1967）先の発掘調査によって得られた土器の分析により、型式を晩期初頭・佐野Ⅰ式・佐野Ⅱ式として細別して報告された（山ノ内町教育委員会『佐野』1967)。

昭和49年穂波農協の倉庫建設計画にともない長野県考古学会佐野遺跡保存特別委員会が北信地方の学会員を中心に結成された。

昭和50年（1975）前年の遺跡保存運動によって佐野遺跡範囲確認調査（第３次調査）が行われた。既発掘地を除いて29箇所の調査地点を設けて行われた。これによって遺跡の範囲（遺物散布地）の範囲がほぼ確認された（山ノ内町教育委員会『佐野遺跡範囲確認調査報告書』1975)。

昭和51年には前年の調査結果に基づき、国の史跡指定となった。

昭和52年、佐野字谷地1015の宮沢氏宅の発掘調査が行われた。以前の開田、宅地造成などで撹乱をうけ、佐野式土器の文化層は存在しなかった。採集された遺物は、石鏃、磨製石斧、土器片である。縄文中期の土器片もあったが、佐野式土器が大部分で、有文のものが50片近く発見された。(山ノ内町教育委員会『第４次佐野遺跡緊急発掘調査報告書』)。

昭和54年、字谷地614ノ14―15、所有者は山ノ内町。駐車場の建設のため、４日間発掘調査を行った。発見された遺物は僅少で、石鏃、土器片、大観通宝などであった（山ノ内町教育委員会『第５次佐野遺跡緊急発掘調査報告書』)。

昭和55年　穂波農協の本館新築工事に伴う発掘調査を行った。発見された縄文晩期遺物は石鏃１点、土器片２点であった。ほかは中世の遺物で、元豊通宝１点、人骨など中世の火葬墓に関するものであった。集石址などもみられたが、所属年代は不明であった（山ノ内町教育委員会『佐野遺跡第６次発掘調査報告書』1981)。

昭和56年７月、藤沢氏宅（藤本屋商店）の改築工事に関して発掘調査が行われた。開田、宅地化などの改変があったが、文化層は案外保存されていた。

遺構は、集石址、石囲み炉址、埋甕などで、土器片7476点の内、有文1640点、石鏃41点、打製石

斧５点などであった。報告書には晩期初頭、佐野Ⅰ式土器の拓影図が多く掲載されている（山ノ内町教育委員会『佐野遺跡第７次発掘調査報告書』1982)。

昭和63年（1988）８月、宮村～湯田中停車場、中野～角間線の交差点西の細長い道路拡張部分の発掘調査が行われた（大字佐野字谷地地籍)。

遺構はピット状のもの、土坑などであった。遺物は晩期以外の土器片を除いて、4500点検出され、有文は10％に満たなかった。晩期初頭、佐野式、氷式併行土器などであった。石器は石鏃、敲石などであった（山ノ内町教育委員会『佐野遺跡第８次発掘調査報告書』1982)。

平成２年（1990）字谷地616―１、佐野遺跡隣接地（国史跡指定地外）に住宅兼店舗（食堂）建築に伴う発掘調査が行われた。ここは内角間川に近く、乱流をうけ地層は撹乱していた。縄文晩期に属するとみられるものは、集石址１基、土坑１基、土器片655点であったが、小片が多く、発掘報告書は未刊である。

平成15年（2003）９月、ほなみふれあいセンターにおいて縄文セミナーの会、寺崎祐助･鈴木徳雄･綿田弘実・中沢道彦・谷藤保彦・久田正弘・渡辺裕之・渡辺朋和・斉藤準・水谷孝之・伊藤順一・山本千春の各氏によって２日間わたり、佐野遺跡出土土器の実測、拓本とりが行われた。調査資料は佐野式土器の晩期中葉段階までである。

この結果は2004年２月、第17回縄文セミナー『晩期中葉の再検討』資料集･記録集のなかで発表されている。

２　山ノ内町の佐野式土器出土遺跡

山ノ内町では標式遺跡の佐野遺跡を除いては佐野式土器が出土したところは２箇所である。そして、量的にまとまっては検出されなく、今後の発見に負うところが大きい。

佐野遺跡は次に記すように北信地方における拠点的な遺跡の性格が強いとみられる。

夜間瀬本郷遺跡群伊勢宮遺跡　山ノ内盆地湯田中面の扇状地末端部に所在する遺跡である。北に高杜山が聳え、西方に夜間瀬川が流れている。東方の山地などから流れる泡貝川が遺跡を貫流し、夜間瀬川に合流している。

縄文前期からの遺物がみられ、関山・南大原式（諸磯ａ式）中期の勝坂･加曾利Ｅ式、後期の堀の内式などとともに、佐野式土器が少量発見されている（『長野県史考古資料編・遺跡地名表』)。

雀崎遺跡（上条）　伊勢宮遺跡の東方に位置し、泡貝川の中流に所在する。発見地は川より微高地になっている。

昭和54年（1979）字雀崎の水田下層から湯本英雄氏によって発見された。その隣地からも発見されている（『上条区史』1994)。

３　北信地方の縄文晩期の遺跡

長野県北部の縄文晩期土器は、過去の研究の成果から、晩期前・中葉に佐野式土器が位置づけられ、後葉には氷Ⅰ・Ⅱ式があてられている。

晩期の亀ヶ岡式土器は東北地方に核があり、その本来の文化圏は新潟県中越地方までで、佐野を含めた中部高地はその外縁部にあたっている。

この亀ヶ岡式土器は山内清男（すがお）氏の研究により、岩手県大洞（おおぼら）貝塚出土土器などによって大洞Ｂ・ＢＣ・Ｃ・Ｃ１・Ｃ２・Ａ・Ａ´式と該期の編年をされている。そして、大洞式と関東・東海地方の後晩期遺跡を含めた対比のなかで、佐野式土器の研究が進められている。

この佐野式土器は長野県北信地方と新潟県上越地方の分布している。

佐野式土器は①晩期初頭土器群②佐野Ⅰａ式土器③佐野Ⅰｂ式土器④佐野Ⅱ式土器⑤所属時期の不明な無文土器が知られている（長野県史・考古資料編遺構・遺物))

佐野式土器の出土している遺跡は、長野盆地を中心にして表１表のようである。

第１表　北信地方の佐野式土器の出土地名表

番号	遺跡名	所　在　地	立　地	備　考
1	北原	飯山市旭北原	台地	晩期土器と記されている
2	山ノ神	飯山市静間法花寺	扇頂	
3	岡の峯	野沢温泉村豊郷	扇央	
4	蕨平	野沢温泉村東大滝	段丘	
5	観音堂	木島平村穂高	台地	
6	伊勢宮	山ノ内町夜間瀬	平地	
7	雀崎	山ノ内町上条	平地	
8	佐野	山ノ内町佐野	台地	
9	清水端	小布施町雁田	扇央	
10	湯倉洞穴	高山村牧	山腹	
11	横松原	須坂市亀倉	段丘	
12	お天神	須坂市塩野	段丘	
13	富ケ原Ⅲ	信濃町大井	扇状地	
14	仁之倉	信濃町柏原	山麓	
15	明専寺茶臼山	飯綱町野村	山麓	
16	根上	長野市鬼無里	山麓	
17	宮崎	長野市若穂	扇端	
18	保地	千曲川市坂城	段丘	
19	円光房	千曲川市坂城	台地	
20	唐沢岩除	真田町菅平	段丘下	

出典『長野県史・遺跡地名表』縄文セミナーの会『晩期中葉の再検討』

佐野遺跡より既出された土器

第Ⅲ章　遺　　物

第１節　縄文時代

１　土　　器

佐野遺跡出土の土器は、縄文晩期中葉のものが主体的に見られるが、その土器文化は東北地方に核がある亀ヶ岡文化園の影響下に生まれたものである。しかし亀ヶ岡文化圏とは地理的には隔たっている。

隣の新潟県北半は亀ヶ岡式系土器の範疇にあり、同県南半は、長野県と北陸系の土器に混じって、亀ヶ岡系の土器が客体的にみられるといわれている。

同様に佐野遺跡も亀ヶ岡式文化圏の外郭に位置している。地理的には先にみた土器と、直接または間接的に影響をうけているとみられる。

佐野式土器の編年は、永峯（1967）によって大綱がしめされた。①亀ヶ岡系の佐野式成立以前の土器、②佐野Ⅰ式土器（大洞ＢＣ式とＣ式伴行）、③佐野Ⅱ式（大洞Ｃ２式伴行）と形式分類された。その後、大原（1981）は、飯山市山ノ神遺跡の調査結果から佐野式土器の細分を試みた。佐野Ⅰａ式は連鎖状三叉文（三角状にえぐりとった文様が鎖のように連なった文様）を主な文様とし、同Ⅰｂ式は、鍵の手文が主文様であるとした。

この時期には30個体以上の亀ヶ岡式土器の搬入があり注目されている。

佐野Ⅱ式は粗大な工字文（沈線で「工字状」に描かれた文様）を指標としている。

そのほか現段階では所属時期が不明な、口端の加飾、口縁内外に沈線があるものなど、無文系の土器がある。これは深鉢を中心としてあり、量的には多数を占めている。

そして佐野式土器を使用した人々（部族･集団）は、善光寺平一円から上越地方に居住していたといわれている（永峯1976）。

2004年の縄文セミナーの会の『晩期中葉の再検討・資料集・記録集』中沢ほか（2004）の編年では、溯古から〈大洞ＢＣ式＝安行３ｂ＝佐野Ⅰａ式（宮崎遺跡２号住）〉→〈佐野Ⅰｂ式→大洞Ｃ１式＝安行３Ｃ式〉→〈佐野＝（+）〉→〈大洞Ｃ２式＝安行３ｂ式＝佐野Ⅱ式（宮崎遺跡10層）〉の変遷が示されている（大洞ａ、ａ´式期は対象外）。

それによれば、佐野Ⅱ式の指標は、曲線をもった粗大な工字文であり、それが直線的な工字文に変化し、さらに岡の峯遺跡（野沢温泉村）から出土した、抉りで三叉状に描かれた曲線的な工字状文に、列点刺突が加えられた土器を岡の峯類型とよび、晩期中葉の終末に位置づけている。この類例は籠峯遺跡（妙高市）、葎生遺跡（同）にもみられるという。このように『晩期中葉の再検討』では、佐野式土器を検討し、晩期中葉の変遷を追っている。

さらに今回の調査で、浮線網状文と呼ばれる土器が検出された。長野県では氷式（小諸市川辺地区出土土器の形式）と呼ばれている。晩期後葉に属する土器である。

既述のように今回の調査は広範囲な面的に発掘したものでなく。接合も少なく、細片が多いので文様の全容の判明する土器が少なく、恣意的な面もあるが、主に土器の文様によって次のように記述する。

1　三叉文の土器
2　刺突文の土器
3　隆帯上施文の土器
4　雲形文の土器
5　鍵の手文と入組文の土器
6　工字文の土器
7　縄文と撚糸文のみられる土器
8　口縁部に加飾のみられる土器
9　浮線網状文の土器
10　条痕のみられる土器
11　沈線文と凹線状文のみられる土器
12　無文の土器について

１　三叉文の土器（第５図１～８）

三叉文とは三角状にえぐりとられた文様で、三角の先端がトゲのようにするどいものが古式とい

われている。

1は壷の口頸部の破片である。内外面黄褐色を呈する。縄文を磨消した沈線の間に列点を施し、三叉文を施している。佐野式土器成立前（晩期初頭）の搬入品とみられる。

2は①と同体の土器である。

3は小形の鉢で上半部の破片とおもわれる。外面は灰褐色で、内面は淡い黒色を呈し、よく研磨されている。三叉文が個別にあり、属性は①と同じ土器とみられる。

4はやや大形な鉢の口縁部の破片である。内外面淡い黒色を呈する。口縁部が内傾し肥厚している。口唇部は波状で加飾があるらしい。縄文が施されない部位もあるが太い沈線で磨消している。三叉文は丁寧には、刳去されていない。胎土に石英粒を含み、内面は研磨が粗雑で模造された亀ヶ岡式系土器である。

5は壷形の土器で、表面に酸化鉄の付着がみられるが、暗灰色の土器である。口頸部に粗い左傾（ＲＬ）縄文を施し（Ｒは２段目、Ｌは１段目の意味で、縄の撚り合わせが「２段の縄」）、端をＤ字状の刺突を右から左に施している。下には沈線があり、肩部に単独に三叉文がある。晩期初頭の土器とみられる。

6は深鉢型の土器である。内外面黄褐色を呈する。口唇部はやや内傾し平坦である。無文帯の下に平行沈線の縄文帯があり、下の曲線には僅かに三叉文とみられるものがある。

7は暗褐色の器壁の薄い壷または、注口形の磨研された土器である。表面に赤彩がみられる。搬入された土器のようである。

8は三叉文はみられないが、小形の壷の破片とみられる。内外面暗褐色を呈し、研磨されている。曲線を描く沈線で縄文が磨消されている。晩期初頭の土器とみられる。

2　**刺突文の土器**（第５図９～11、13～24）

9は深鉢形の土器で、内外面暗褐色を呈する。口唇部は両面から削られて薄い。口縁下にＤ字状刺突列点文を左から右に施した後、沈線３条を施文している。

佐野ではあまりみられない単純な文様である。この刺突文のみられる土器は、石川県の御経塚式や、安行３Ｃ式に多用されている。

10は壷形の土器で、腹部の破片である。表面は淡黒色と赤褐色を呈し、内面は暗褐色を呈する。下の沈線間にＤ字状に浅く刺突列点されている。上の沈線は凹線状で断絶もある。他の文様の存在も考慮される。

11は鉢形の土器とみられる。外面は暗褐色で内面は、にぶい黄褐色である。中半部に沈線間にＤ字状の刺突列点を右方向に施文する。模倣された亀ヶ岡系の土器と思われる。

13は壷形土器の口頸部破片である。外面は、にぶい黄褐色で、内面は暗赤褐色を呈する。口唇部は内面に傾斜し、下に浅い沈線状のものがある。右傾（ＬＲ）縄文が施され、曲折部の沈線間にＤ字状列点が左方向に施されている。

14は壷の肩部の破片と思われる。外面暗褐色、内面黄褐色の土器片である。曲折部の下の沈線間にＤ字状文が向きを変え施されている。

15は鉢形の土器とみられる。内外面に炭化物が付着している。円形とみられる２条の沈線にそってＤ字状刺突文がめぐっている。

16は鉢形の土器と思われる。外面暗赤褐色、内面赤褐色の土器である。施文は断面が薄いＤ字状の工具（整形具または施文具）で、密に刺突する文様である。

17は壷形の土器とみられる。内外面暗褐色の土器である。肩の曲折部の沈線間にＤ字状列点が右方向に施文されている。間をおいた下方にも同様な文様がある。

18は鉢形の土器とみられる。内外面淡い黒色を呈している。胎土に雲母もみられる。平行沈線と左へＤ字状列点文がみられる。

19は深鉢形の土器である。外面は淡い黒色～赤褐色で、内面は暗褐色を呈する。口縁部に近いと思われる位置の沈線間に右へＤ字状列点文が施されている。

20は小形の鉢形の土器で内外面が研磨されてい

る。赤彩も僅かにみられる。沈線間に左への連続刺突が施されている。下の沈線は破片のため明瞭ではない。

21は内外面が明黄褐色を呈する深鉢形の土器である。口縁部の形態は不明であるが、凹線状の沈線が４条あって、下の沈線間に細い痕跡状の連続刺突が施されている。かなり後出的な要素が多い。

22は外面が明黄褐色、内面は橙褐色を呈する中型の壷形土器の頸部破片で、半精製である。曲折部に左から右に連続刺突され、下に細い沈線がある。

23は内外面が褐灰色で精製されている。壷形の肩部の破片である。沈線間に右から左に連続刺突されている。

24は皿形土器の破片で、精製されている。外面灰白色、内面淡黒色を呈する。沈線間にＤ字状に右から左に連続刺突され、下の縄文帯を磨消している。佐野Ｉｂ式期の搬入品とおもわれる。

３　隆帯上の施文土器（第５図12）

12は内外面が赤褐色を呈する土器である。口縁は波状を呈する深鉢とみられる。口縁下に隆帯があって両側に沈線がある。隆帯は波頂部？に向かって幅が狭くなり、上に棒状工具で連続押捺されている。下にはＬＲ縄文が沈線で磨消されている。安行３ａ式などから影響をうけた、晩期初頭の佐野式成立以前の土器と思われる。

４　雲形文の土器（第５図25～29）

大洞Ｃ１式（佐野１式）に見られる文様である。しかし、小破片のため確定はできない。

25は深鉢の胴部の器壁の稜部分の土器で、内面は漆黒色で研磨され、外面は赤褐色を呈し、胎土に石英粒がみられる。模造された亀ヶ岡式土器である。

26は深鉢形の土器とみられる。曲線の沈線に磨消縄文がみられる。胎土などから土着の土器とみられる。

27は小形の壷形土器、肩部の破片である。ＬＲ縄文に沈線がある。沈線には曲線がみられるが、文様の全容はつかめない。

28は坏形土器の器台部の破片である。黄赤褐色の土器で、内面の研磨は粗である。くびれ部と底部に沈線が平行し、上下を結んで斜状の沈線間に磨消縄文がみられる。

29は深鉢形の土器と思われる。外面は暗褐色、内面黒色の土器である。石英などの砂粒が目立つ土器で、研磨は十分ではない。ＬＲ縄文に沈線が直と曲線にみられる。模倣された土器である。

５　鍵の手文と入組文の土器（第５図30～40）

永峯（1967）は鍵の手文及び入組文の種類と系統図で、三叉文と羊歯状文の結合を説明している。それに従って抽出したが、破片資料のため、先の２種類の土器の文様に、平行沈線間に縄文がみられるため、それも含めた。

30は壷形の土器とみられる。内外面黄褐色を呈する。研磨も良好である。無文部があって、狭い沈線間に右傾縄文がみられる。

31は深鉢形の胴部の破片とみられる。ＬＲ縄文を施してから、平行沈線を施している。

32は小型の壷形の土器で、胴部の破片である。内外面暗褐色で、成型は粗製である。縄文を施した後、細い平行沈線を施している。

33は壷形の土器とみられる。表面淡黒色、内面黄褐色の土器である。肩部の破片で、ＬＲ縄文に平行沈線と、斜めの沈線が２条みられる。

34は鉢形の土器とみられる。内外面黄褐色を呈し、研磨されている。ＬＲ縄文に沈線の直線・曲線がみられる。

36は鉢形土器の口縁部の破片である。口唇部は内傾している。外面明褐色、内面明赤褐色である。口縁直下の無文部の下、平行沈線間にＬＲ縄文がある。下の無文部には曲線や、縦の沈線がみられるが、入組むかは不明である。

37は⑥と同種の文様の精製土器である。内面は黄褐色、外面は橙黄色を呈する。ただ、曲線が明瞭である。佐野１ａ式期に属するとみられる。

38は深鉢形の土器とみられる。胴部の破片で外面は黒色、内面は暗褐色を呈し、精製土器に属す

る。横に平行する沈線間には、右へD字状の刺突列点文がある。沈線より先に施された縦の沈線があり、無文部と縄文部がある。鍵の手文になるかは不明である。

39は内外面が赤褐色の深鉢形の土器の破片と思われる。無文帯に刺突列点文が施され、縄文帯に沈線が直線、L字形になる鍵の手文かとおもわれる。

35は皿形土器の底部の破片である。黒色で研磨され、胎土に石英粒がみられる、底部の接地面は無文である。外周に沈線で2重の円を描き、中にLR縄文を施す。上部の文様はわからないが、ここに分類した。

写真図版Aは内外面が黒褐色を呈する土器である。小形壷形の粗製土器の肩部の破片である。右傾のLR縄文を細い沈線で磨消している。他の文様の有無は不明だが、便宜上ここに分類した。

40は内外面が暗黄褐色の精製の鉢形土器である。左傾のLR縄文の下に細い沈線が2条ある。

6　工字文の土器（第6図41～45）

沈線で「工字」状にえがかれる文様で、呈示したものは線の細いものから太いものに変化するとみられる。

41は球形に近い鉢形土器の破片である。外面は淡黒色、黄褐色で、内面は黄褐色である。内面の研磨はやや粗製である。上下に平行沈線があって、その間にT字の沈線がみられるが、三叉文風に角が刳去されている。粗大工字文の先駆的な文様であるとみられる。

42は低い波状口縁部の深鉢形土器で暗褐色を呈し、口縁内面に2条の沈線がある。胎土に雲母が含まれ研磨もかなりよい。

胴部の外張面に太い沈線で、工字文がみられるが、模式的な工字文ではない。斜状の沈線もある。

43は深鉢形の土器である。成型は粗雑の方で、内面黄褐色、外面暗褐色の土器である。口縁は外反し、LR縄文がある。下に浅い凹線状の沈線があり、斜状の沈線は42に類似している。

44は赤褐色を呈する。鉢形の土器で磨研は粗雑である。沈線には長楕円、直線などがみられるが、ここに含めた。

45は内面赤褐色、外面暗赤褐色を呈し、胎土に砂や雲母などがみられる粗製深鉢の小破片である。粗大工字文が僅かに認められる。

7　縄文と撚糸文のみられる土器（第6図46～63）

小破片のため、全体の文様はつかめないが、縄文と撚糸文のものを集成した。

46は赤褐色を呈する深鉢形の土器である。縄文を斜状または上下に施している。研磨は中位である。

47―1は赤褐色を呈する深鉢形の土器である。研磨された器面には接合痕も残されている。単節のLR縄文が施文されている。

47―2は外面が赤褐色、内面褐色の土器である。胎土に雲母がみられる。LR縄文が施文され、下に細い沈線があり、内面にも沈線が1条ある。

48は内面が白灰色、外面は灰色と暗灰色を呈する。胎土には砂粒がみられるが、焼成はよく、内面は平滑である。外面には接合痕がある。単節のLR縄文が施文される。

49は外面が褐色～黒色で、内面は赤褐色を呈する鉢形の口縁部破片である。縄文は左傾に2段みられる。

50は器厚が薄く成型は粗製である。内面の器壁の砂粒が成型時に動いている。外面には単節のLR縄文が施文されるが、空白部もある。器形は不明である。

51は外面が白灰色、内面は黒色を呈する。深鉢と思われる。外面に単節のLR縄文が施されるが、斜状の綾絡（あやくり）文もみられる。

52は内外面が褐色を呈する深鉢形の土器である。器面はやや粗である。単節の縄文がまだらに押捺されている。

53は外面が黒褐色、内面は黄色褐色を呈する鉢形の破片で、内面は平滑である。表面には単節のLR縄文がみられる。

54は外面が褐色、内面は黒色平滑である。胎土に細かな石英粒がある。深鉢の破片で、単節のL

R縄文がある。搬入品とみられる。

55は内外面が暗赤褐色の鉢形の土器である。器面はやや粗である。単節縄文があり、綾絡状のものもある。

56は外面が暗褐色で、内面は赤褐色の深鉢形の土器である。撚糸が素材（施文具）のためか、右傾の節は明確ではない。

57は内外面が黒色を呈するが、内面は粗である。縄の節はあまり明確ではない。環状の部分もある。搬入された深鉢かと思われる。）

58が外面は黄褐色、内面は黒色の平滑の浅鉢形の土器と思われる。撚糸文が横走に密に施されている。搬入品かと思われる。

59は内外面が黒色の小形壷形の口縁部である。胎土に雲母がみられる。口唇部は円形で内傾し、その下に１条の沈線がある。

外面は口縁下から肩部の帯状の部分に左傾の撚糸文がある。搬入の土器である。

60は外面が黄灰褐色、内面赤褐色を呈する深鉢形の土器である。胎土に白色の粒がみられる。右傾撚糸文の下部には、細い沈線がみらる。

61は外面暗褐色、内面は暗灰色の平滑の深鉢形の土器である。撚糸文はまだらに施されている。

62は内外面が赤褐色の薄手の土器である。小形の深鉢形の土器の破片で、撚糸文が縦位に施文されている。晩期の土器か疑点もある。

63は外面は明褐色、内面は灰褐色で平滑である。底部近くの深鉢の破片である。外面は（ａ）編み物（編布）の文様か、または（ｂ）撚糸を密に転がした文様かと推定されるが明確ではない。（ａ）とすれば型に入れた成型が考えられる。

８　口縁部に加飾のみられるもの（第６図64～67、70～73）

64は外面が暗褐色、内面黒色研磨された深鉢形の土器である。口唇部は内傾につくられ、細い棒状工具で斜めに裁痕を連続させ、Ｂ突起を付加させている。口縁下に右傾ＬＲ縄文帯があり、下の沈線間には連続刺突されている。下は無文である。搬入された土器である。

65は外面が明褐色、内面は黄褐色で研磨は粗である。深鉢形土器で、口唇部はやや内傾し、やや幅広い工具で、外面から押捺を加えている。半精製の土器で、口縁部は押捺によって小波状を呈している。右傾のＬＲ縄文が密に施文されている。亀ヶ岡系の第２次文化圏からの搬入品かとみられる。

66は外面が暗褐色、内面は黄褐色で研磨されている。そして沈線が１条あり、そこに穿孔されている。鉢形の土器とみられる。

口唇部は内傾し、突起が付加されている。口縁部下は右傾縄文帯で、Ｄ字状の刺突が右方向に施文され、後に沈線で縄文を磨消し、連続刺突文と沈線を平行させている。下部は無文である。この連続刺突文列は羊歯状文の便化したものとみられないであろうか。

67は内外面が黄褐色で研磨されている。内面には段がみられるので、壷形の土器とみられる。やや内傾した口唇部には棒状工具で斜めに連続押捺され、低いＢ突起がある。

外面は口縁下に無文帯があり、屈折部から下の沈線間に右傾磨消し縄文帯がある。下は無文である。

69は内外面が薄墨色し、研磨されている。口唇部は平らで外面に僅かに肥厚し、その部分に押捺が加えられている。

口縁の無文帯の下に沈線が２条あり、内面にも２条みられる。

70は内外面が薄墨色で、研磨されている。皿形の土器とみられる。口唇部はやや内傾し、斜めに棒状工具で連続押捺されている。他に文様はみられない。

71は内外面が赤褐色を呈する。研磨はよい。破片のため加飾部の全容が不明である。深鉢形の口縁部で、加飾部が外反し、山形状を呈していたと推定される。

斜めにやや平行に沈刻が加えられている。胎土に雲母が見られることなどから搬入品とみられる。

72は内外面が明黄褐色を呈している。ごく小型の皿形の土器とみられる。加飾部の先端が欠損し

て詳細が不明である。加飾部は刻みによって造形されている。穿孔が2箇所あり、吊り手用ともみられる。実用的でなく祭具かもしれない。

73は外面が赤褐色、内面は黄褐色と赤褐色を呈する鉢形の土器とみられる。外面には右傾縄文が僅かに観察される。

口縁が外反して波状とみられるが、欠損して全容は不明である。口唇部は内傾し、その下は段状となり、沈線が1条屈折部にみられる。

写真図版Bは内外面黄褐色の精製された小型の椀形土器の口縁部内面の破片である。加飾は72と類似している。

写真図版Cは内外面薄黒色し、胎土は白灰色を呈している。甕形の土器で外面は研磨されているが、内面は粗製である。口唇部に斜めに押捺が加えられている。

9　**浮線網状文の土器**（第6図76、77）

佐野遺跡には氷1式（大洞A式）に併行する浮線網状文土器が存在することは『佐野』、『長野県史・考古編』その他で指摘されていた。しかし筆者の怠慢もあって資料提示が確認できなかった。

『佐野遺跡第8次発掘調査報告書』（田川ほか1989）には浮線網状文と条痕文土器の出土が報告されている。今回の調査では浮線網状文と、変形工字文の土器が2片確認できた。

76は外面が明黄褐色を呈し、内面は暗黄褐色で、よく研磨されている。鉢形の土器である。胎土に鉄分粒もある。外面の現状はややあれている。口唇部が僅かに破損しているので、明確ではないが低い波状を呈するかもしれない。陽刻の浮線は2本単位で結束部がある。文様帯は口縁部に1連のようである。

77は内外面が黒色を呈している。口縁部の小片である。内湾する鉢形または深鉢形の土器と推察される。口唇部は円く、突起もある。内面の口縁部に沈線（凹線状）1条あり、下部とは段を成している。外面の口縁には僅かな無文帯があり、浮線部は凸帯状に盛り上がって、屈折を成している。浮線文（変形工字文）は上下の幅が狭く結束部はなく切れている。破片のため即断はできないが、茅野市御宮司遺跡出土品に類例があり、氷式第1群土器（永峯1969）と時期的に関係が深い土器とみられる。

しかし、新潟県方面との交流も無視できず、長岡市藤橋遺跡の藤橋Ⅲ式（大洞A式）『新潟県史資料編1、原始・古代』1983（図版437）や、同県見附市耳取遺跡（図版432）にみられる、浮線網状文や、変形工字文との関連を強調したい面を持っている。

10　**条痕のみられる土器**（第6図78、79～81～83）

78は内外面が淡黒色を呈する。甕形の土器である。研磨は粗雑である。外面の口縁下に段があり、そこから縦状に条痕文がみられる。この胴中部から条痕の施される土器は、氷式の第1群土器（永峯1969）にみられる。

79は外面が暗褐色、内面黄褐色を呈する。深鉢（甕）の胴部破片である。研磨はやや粗である。浅い刻みをつけた板状の工具で成型したものとみられる。

81は外面が暗赤褐色、内面は暗褐色を呈する。深鉢（甕）の底部近くの破片である。細い条痕が縦に施され、底部の上で終わっている。

82は外面が暗褐色で、内面は明褐色を呈する。深鉢の上半部の破片である。条線の間隔がそろい81より、先の尖った工具（竹管状工具）で斜めに施文している。

83は外面が暗褐色、内面は赤褐色を呈する深鉢形の土器である。縦状の条痕はやや曲線となっている。貝殻による施文とすれば、晩期末葉の土器となる。

11　**沈線文と凹線文のみられる土器**（第7図84～96）

ここでは他の文様がみられず沈線文と凹線文の土器を観察する。沈線文の土器は、北信地方でも縄文後期の加曾利B式にも多用された文様である。

しかし佐野遺跡は現時点では、晩期の遺跡と認定され、縄文後期の土器は混在していない。また

凹線文の土器は晩期後半以降の所産と考えられる。

84は外面が黒色、内面は黄褐色を呈する深鉢形の土器である。研磨もかなり良好である。口唇部は円く内傾し、僅かに肥厚して段となり器壁となる。外面には3条の平行沈線文がある。

85は内外面が黄褐色を呈している。口唇部は外壁より円く内傾し、肥厚するが段は作らず内壁となる。外面には2条の平行沈線文がみられる（拓影図では下の沈線は切れている）。

92は内外面が暗褐色～淡黒色を呈する。胎土には雲母がみられる。大型の深鉢の1個体の底部を除く二分の1が発見されている。器壁の研磨は中庸である。口縁部は外反し、内側の縁に2条の凹線状の成型痕とみられるものがある。口縁部は外反し、胴上半部がふくらむ、その外張部に3条の平行沈線がある。

86は内外面が赤褐色を呈し、研磨されている深鉢の破片で、口縁部が僅かに外反し、口唇部は円く内傾している。外面に1条の沈線がある。

87は小型の鉢形の土器の口縁部の破片である。外面は黒色、内面は暗灰色を呈する。口唇部は円く外面に5条の沈線がみられる。

88は外面が灰褐色～淡黒色、内面は明黄褐色を呈する鉢形の土器とみられる。口唇部は少し円く内傾している。外面の口縁がくびれ、下に沈線が2条みられる。拓本図では3条の沈線となっている。

90は内面と口縁部が黒色の胴部がふくらむ鉢形の土器とみられる。内面は研磨されている。口唇部は円く、器壁より薄く作られ、内面の接点には沈線が1条あり、外面はふくらみをもたせて凹線状となっている。

93は外面が淡黒色で、炭化物が付着する。内面は暗褐色を呈し、研磨されている。器形は鉢形よりも壷形に近く、胴部にふくらみがある。

口唇部は円と扁平の部分があり、内面に1条の凹線状文があり、段となっている。外面の口縁のも同じものがある。そして胴部上には凹線状の沈線が4条みられる。在地産ではないとみられる。

94は外面が黄褐色、内面は赤褐色の深鉢形の胴部破片である。研磨は通常である。胴部上に凹線状の沈線が4条みられる。文様が粗大工字文に類似し、佐野Ⅱ式期の所産とみられる。

91は外面が黒色、内面灰褐色を呈する鉢形の土器とみられ、研磨はよい。口縁は円く内側に肥厚している。外面の口縁下に凹線状の浅い沈線がみられる。

95は外面が灰褐色～黒色、内面は黒色の深鉢形の土器で、胎土には石英粒が目立つ。口唇部は円く内傾している。器形の変化にとぼしく、ゆるく外反するとみられる。外面には3条の浅い凹線状の沈線がある。佐野Ⅱ式以降の所産とみられる。

96は雲母の細片が含まれ、内外面暗黄褐色を呈する口縁部の破片で、深鉢形の半精製の土器である。口唇部は平らで僅かに内傾している。外面には文様がみられず、内面の口縁部に凹線状の沈線が1条みられる。搬入品とみられる。

89は内外面が黄白色を呈する鉢形の土器で、石英粒が器面にみられる粗製土器である。口端は円く内面下は凹線状にくぼみ、段を作って器壁となっている。

12　無文の土器について（第7図97～102、108、110、111）

佐野遺跡でも無文の土器（破片）が大多数を占めている。それらの大部分は、深鉢（甕）形を呈する粗製土器と推定される。これらの土器は煮沸用としていたため、耐用の期間も短く、更新されたことであろう。

また、口縁部に文様が集中する傾向の土器が多くあることも考慮しなければならない。

このように製作された時期を判別する文様がみられないため、所属時期を決定するには、成型、胎土、焼成など総合的に観察して決めなければならない。一見して在地産と思われない土器も存在するのである。数例について検討する。

97は外面が黒色、内面は黄褐色を呈する深鉢形の粗製土器である。口唇部は器形よりやや薄く、円い。在地産とみられる。

98は内外面が暗褐色の深鉢形の土器である。粗

製で胎土に雲母が目立つ。口唇部は平で、器形は変化なく、外反するとみられる。搬入品の可能性がある。

99は浅鉢形の土器で、内面は黒色で炭化物も認められ、研磨されている。口唇部は円く内傾している。外面は黄褐色で研磨はやや粗雑である。口唇部の外面がまくれて器壁は凹線状となっている。意図的なものかは不明である。

101は外面が褐色、内面は赤褐色の粗製の浅鉢である。口縁部は円く内面に肥厚している。

100は外面が暗灰色、内面は赤褐色を呈する深鉢（甕）形の土器で、半精製である。口唇部は円く内側に肥厚し、内傾している。

102は内外面が赤褐色の深鉢形の粗製土器である。ゆるく外反する器形で、口唇部は少し円く外傾している。在地の土器とおもわれる。

111は口縁部の形態が不明な、深鉢の胴部の破片である。胎土には石英粒が目立つ、内外面は平滑でなく、外面は縦状に成型による浅い擦痕がみられる。

108は内外面が赤褐色の粗製深鉢土器である。口縁の直径は30㌢をこすものとみられる。口唇部は円く、内傾し、変化なく外反する器形である。在地産とみられる。

110は外面が黒斑に赤褐色、内面もほぼ同様な焼成の粗製深鉢形土器である。円く外反する器形で口縁直径は、約40㌢と推定される。胎土には雲母も僅かにみられる。口唇部は平らであるが、使用によって崩れた箇所もある。

以上は繁雑な土器の説明であったが、佐野遺跡の全貌の究明のため、あえて記述した。

13　円板状土製品（第７図112）

112は土器片を再利用して円板状に加工したもので、１個検出された。文様はみられない。直径3,3㌢前後、厚さ0,8㌢前後を測る。晩期の遺跡から多く検出されているという。

14　土器の底部圧痕について

土器の底部圧痕について

佐野遺跡の土器底部の網代痕などの考察は、永峯（1967）が初見である。その後の報告書では発掘が小規模のため、拓本図はみられるが、まとまった報告はされていない。この『佐野』１の報告では100個体あまりの土器底部の内、素文（圧痕がないもの）のものと、網代痕と木葉文が約半数づつで、その内、木葉痕は３～４個体と報告されている。

その網代痕・木葉痕の底部は、ほとんど粗製の深鉢の底部であるとされている。

今回、出土したごく小形の深鉢を除く底部の観察では、素文19にたいして圧痕のみられるもの18と同数に近く、木葉痕のものはみられなかった。

網代の観察では超える数の多い方を緯（よこ）条とし、交差する線を経（たて）条として数えているその分類は第２表である。

第２表　底部圧痕分類表

	圧痕種類	図版番号	文番号
1	１本越え、２本潜り、１本送り	８図115、118、124	２～３
2	２本越え、２本潜り、１本送り	８図114、116、117	４、６、13
		119、９図129	14、17
3	２本越え、１本潜り、１本送り		
4	３本超え、３本潜り、１本送り		
5	１本越え、１本潜り、１本送り	８図113、120、124	５、10
6	４本越え、２本潜り、１本送り		
7	雑ざり編み		
8	木葉痕		
9	その他	９図126	21

次に土器底部の圧痕について主なものの観察を記す。（第８図113～149）

115は分類が①で、幅２　前後の堅い細長い素材で編んでいる（尚、土器は乾燥と焼成で１割程度収縮するといわれている）。ヒノキ類、ヨシ類、チシマザサ（ネマガリタケ）などの堅い素材とみられる。

底部の文様の一部には網代から剥離後の、成型時に付着したと思われる胎土が付着している。

117は分類が②で底部は完存している。網代面には凹凸がみられ、円周部には文様がみられない。原体の幅は２～４㍉で編み方は粗である。

底部周囲の胎土は削られるか、使用のため、平坦になっている。胎土には石英粒がみられる、堅い焼成の土器である。

113は分類が⑤である。小片であるが平織りのようである。

114は分類が②で、綾織である。大きい粗製の深鉢で底部から外反している。網代から剥離して成型した時の、胎土が底部に付着した上に、前者と異なった方向の網代痕が僅かにある。

網代の原体の幅は1,5～4ミリで、胎土がやや柔らかいため、網代の下にはみでたと観察される。しかし、焼成は堅く胎土には雲母、石英がみられる。

120は分類が⑤である。編んだ交点がくびれているので、網代の原体はアケビ・マタタビなどのつる性のものと思われる。

124は分類が⑤である。幅3ミリ前後の揃った幅の原体で、素材は115と同じでとみられ、密に織られている。

器形は底部から外反する。胎土に石英粒などがみられる堅い焼成の土器である。

126は分類が⑨で、底部に凹凸があり、やや不確定であるが、成型用の櫛歯状の工具痕と拇指痕？のみられる底部である。櫛歯とすれば歯の幅1ミリ、隙間2ミリとなる。白色粒（岩石の粉末）を含む、焼成軟質の土器である。

コラム　網代

『源氏物語』45帖（宇治十帖）の巻「橋姫」には、11世紀はじめの風物詩として「山荘は網代をかけてある近くの宇治川のほとりで、騒がしい急流の音が耳にします」（瀬戸内寂聴訳『源氏物語』講談社1997）

この解説で、網代は宇治川の風物、竹や木で編んだものを網で引くような形を設置し、その端に簀子を設けて氷魚（ひお）（鮎の稚魚）を取るように仕掛けたもの、と記されている。

飯山市の山の神遺跡の縄文晩期の遺跡の土器には、鮭と思われる線刻画が描かれている。俎上する鮭などをとるには、大河の千曲川より支流の河川が適当で、佐野遺跡に近い夜間瀬川、伊沢川が適していると思われる。

網代の使用は生活用具の、住居、用具、衣類、生産資材など全般にあり、原体の原料も多様なものが使われていたと思われる。

土器の底部について

ここでは土器の底部の形状について観察する。図示したものは、小形のものを除いて無文とみられる粗製土器で、網代痕のみられるものと同様である。大別すると①底部から直ちに外反するもの、②は底部から外面が1～2センチ直立してから外反するもの、③は①②の中間の形式を示すものとに分けられる。

①は土器の底部面を造形の後、上部を作成したとみられる。なお、炭化物の付着は、内部の底部面からやや上がった箇所に多くみられる土器が多い。

2　石　　器

検出された石器は石錐が3点、石斧が2点、残石核6点、石鏃1点、磨石2点、剥片石器2点、剥片を含め総数80点である。その殆どは母岩から剥がされ時に生じた剥片と、道具に加工するときに生じたと思われる剥片である。

1は安山岩製の打製石斧で出土地点№1より出土する。完形品で長さ9,5センチ、横幅5,5センチ、厚さ1,8センチを測る。

2は出土地点№18から出土した、安山岩製の打製石斧で未完成品とおもわれる。

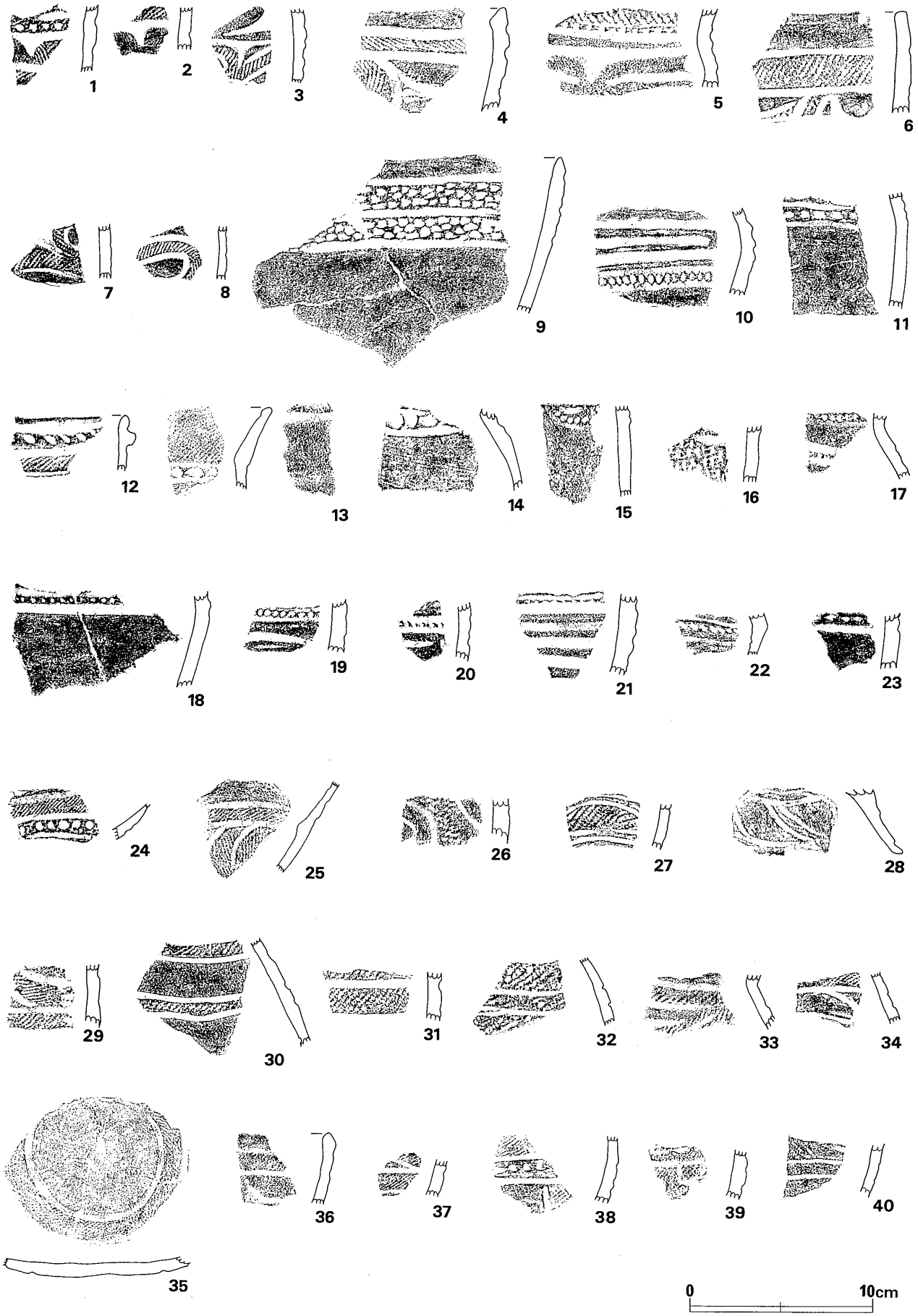
3はつまみを有する石錐で、長さ42ミリ、幅35ミリ、厚さ5ミリを測る。

4は棒状の石錐で長さ3，7センチ、幅7ミリ、厚さ5ミリを測る。

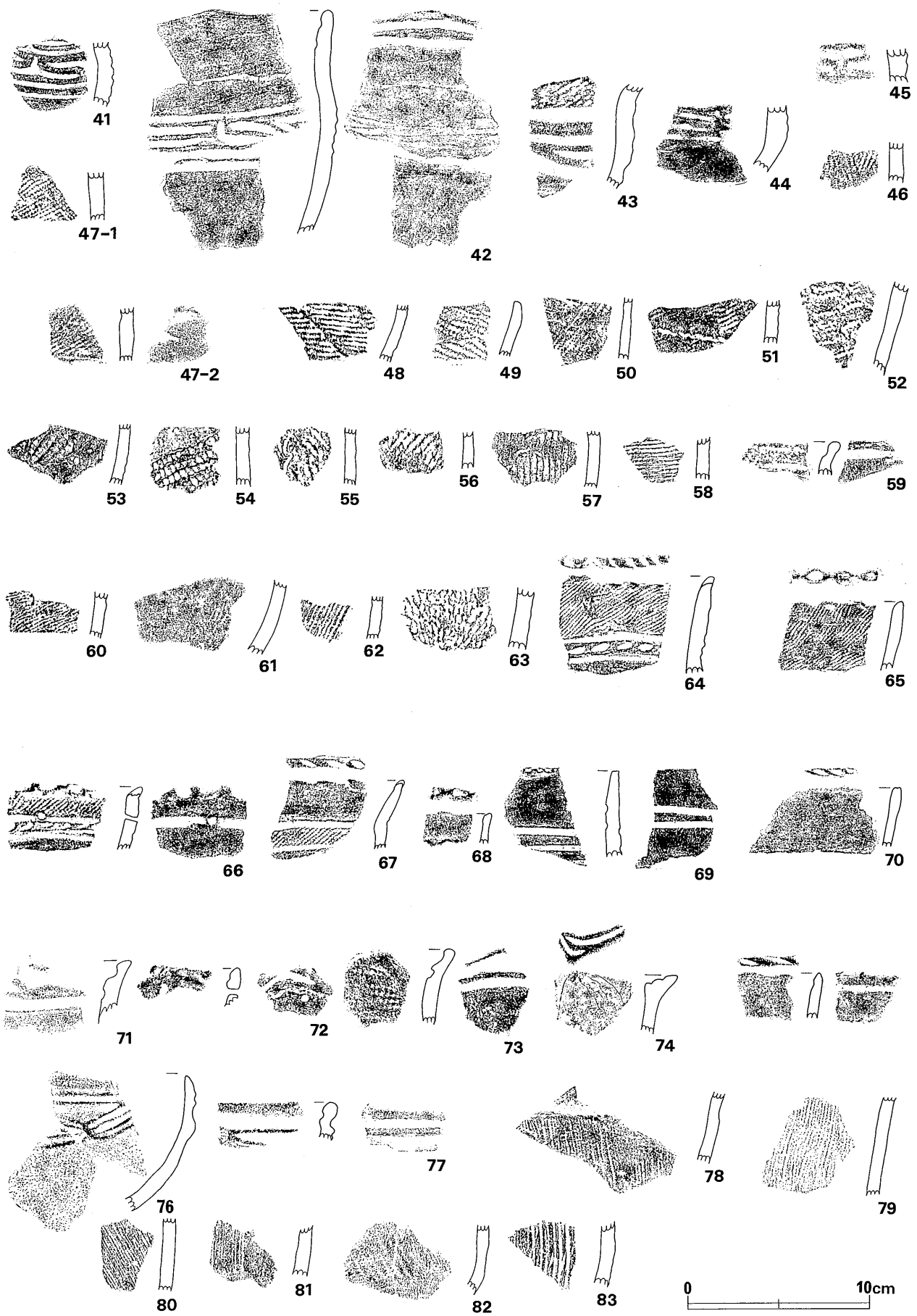
6は棒状の石錐で、樋状剥離を行い、錐部を作り出している。

5は黒耀石製の石鏃で基部が欠損している。

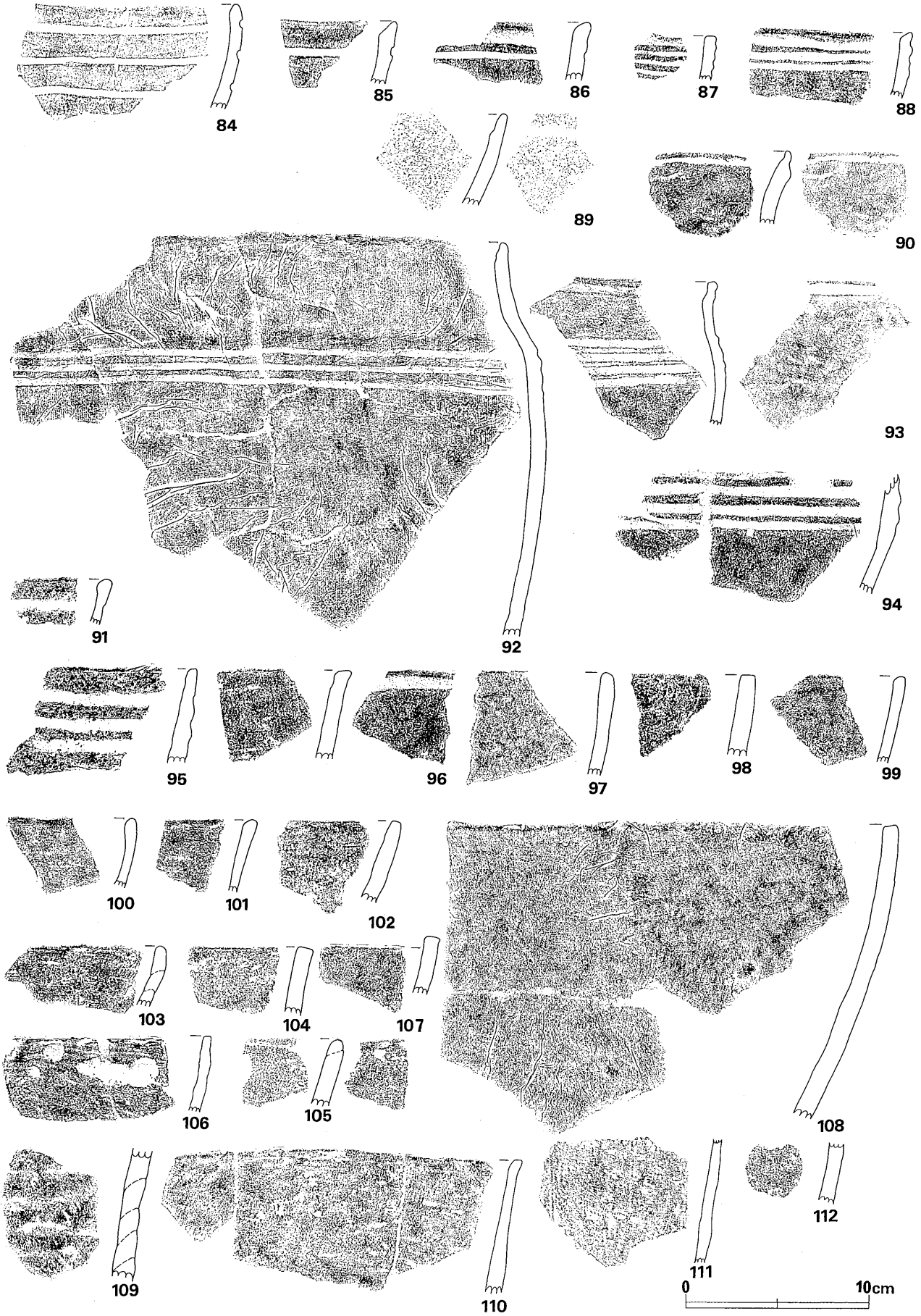
7～13は打点面を残す、石核と思われる。出土地点№2、15、19から1点ずつ、表採4点の合計7点が出土している。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
10cm

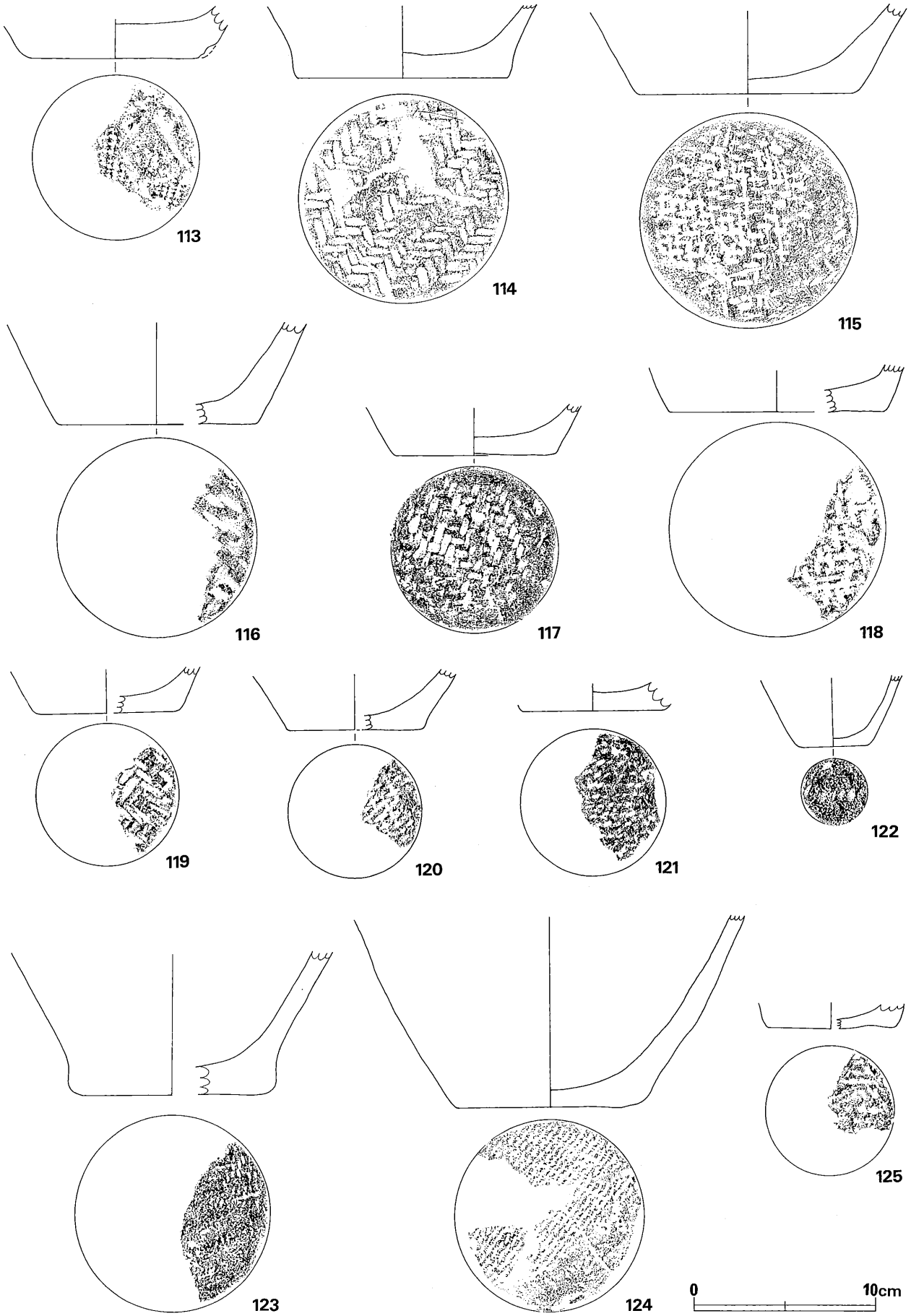
第５図　晩期縄文土器(1)


41
47-1
42
43
44
45
46
47-2
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
76
77
78
79
80
81
82
83
0
10cm

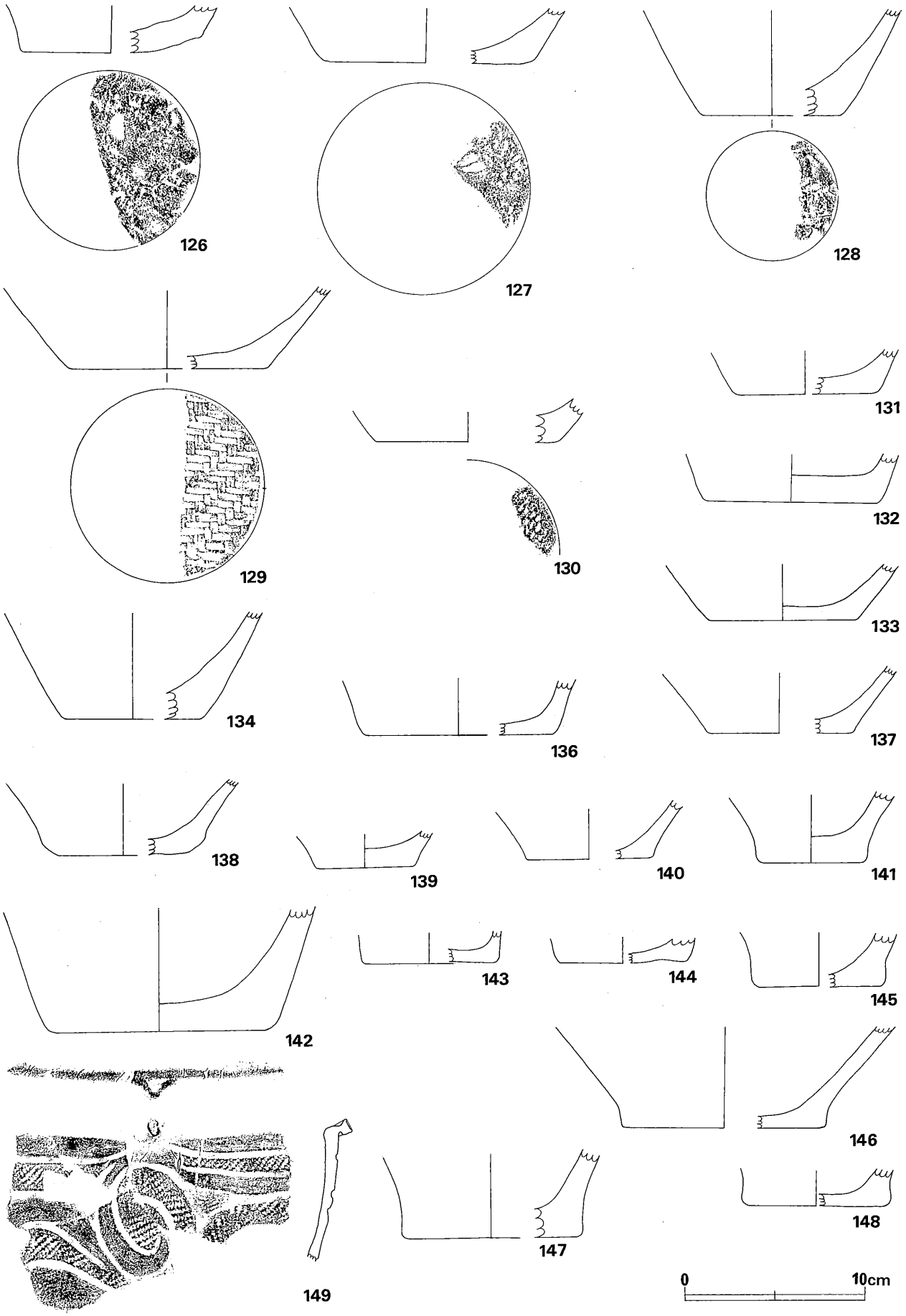
第6図　晩期縄文土器(2)


84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
107
106
105
108
109
110
111
112
0
10cm

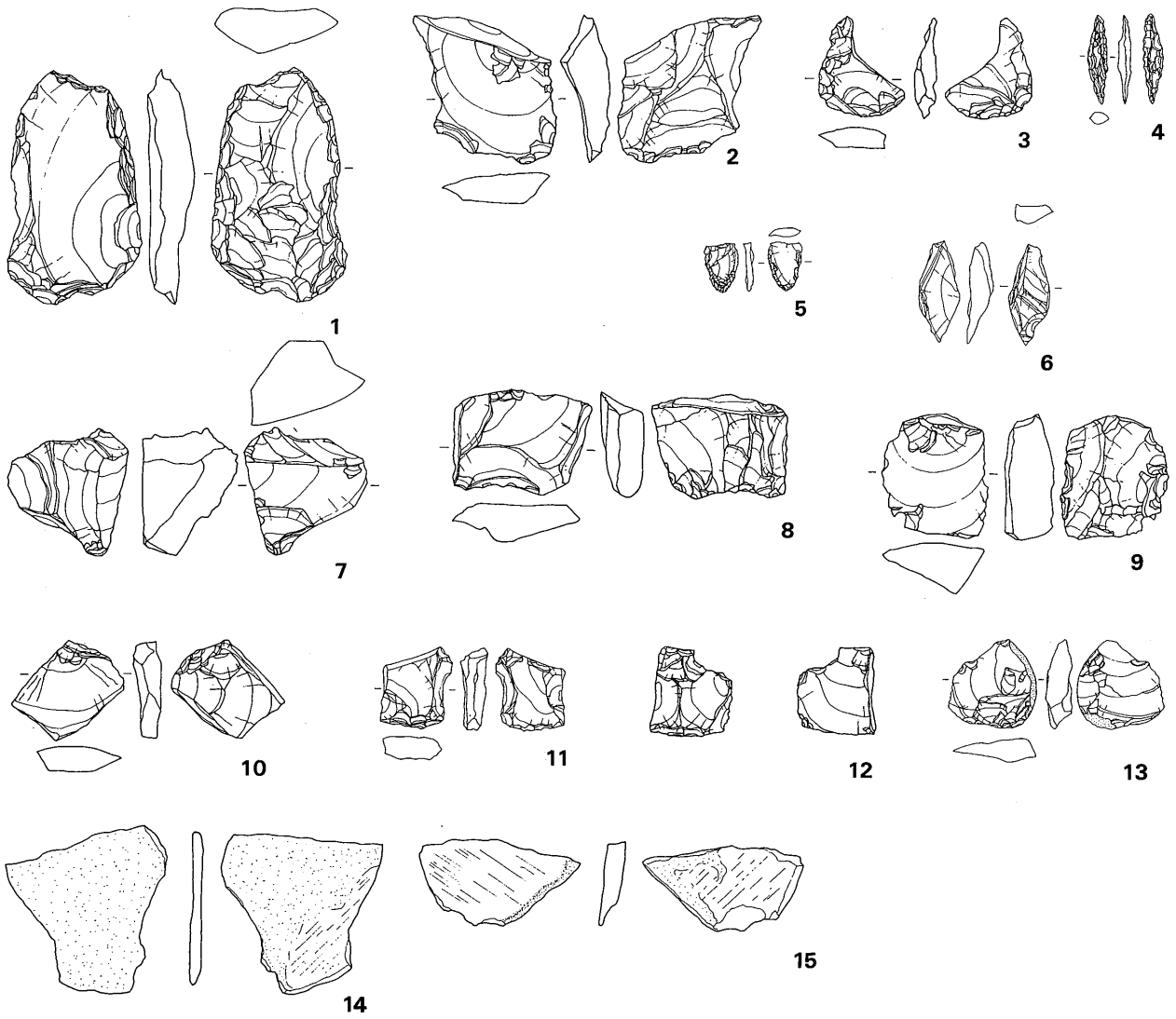
第７図　晩期縄文土器(3)



第８図　晩期縄文土器(4)

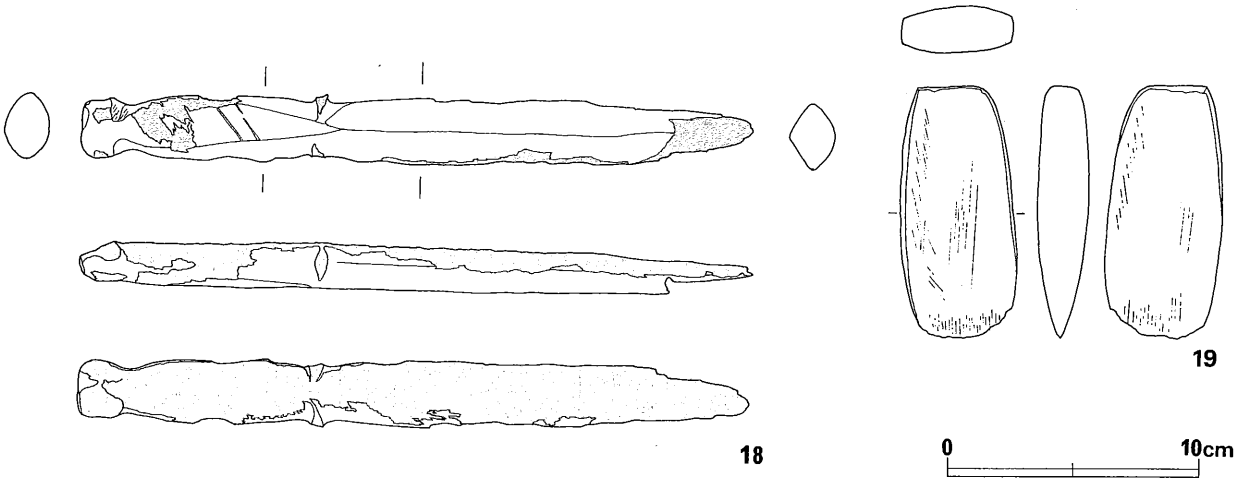

126
127
128
129
130
131
132
133
134
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
0
10cm

第９図　晩期縄文土器(5)



第10図　石　器

第11図　中世の遺物



第12図　近在及び過去の表採遺物

13は自然面から直接剥離し、7～12は剥離軸に直交して打点面を作り出している。側面には石刃状の剥離痕、表裏から不定形な剥離がみられ、残核は両面加工石器状を成す。

14は片面の一部に磨痕がみられる。砂岩製の磨石で、厚さ4㍉の板状を呈する。

15は両面に磨痕がみられる、砂岩製の磨岩で、厚さ7㍉の板状を呈する。

3　近在から表採された遺物

土器（第9図）

149は筆者が1947年頃、佐野遺跡の史跡公園の所から採集したものである。平縁に突起がつけられた深鉢形の精製土器である。外面は暗褐色、内面は褐色を呈している。

外面の突起の下に「の字状」の沈線で縄文を磨消し、それを囲んで玉抱きの三叉文があり、大きく沈刻している。
いわゆる佐野B群土器で、佐野式成立以前の土器とみられる。

石器（第12図）

18、19は、昭和60年（1985）ごろ土建業の中山真三郎氏（中野市小田中在住）が、山ノ内町佐野字宮組639の柳沢千芳氏の住宅の基礎工事中に小形油圧ショベルで掘削中に発見したもので、瑕疵がある。

発見して10年ほど経過して筆者（檀原）に連絡があったものである。

発見場所は内角間川と三沢川の合流地点の北側で、川岸に面した佐野扇状地面である（第3図参照）。深さ5～60㌢の、拳大の石礫が細長く集積した中から、石剣が発見され、さらに10㍍程離れた所より磨製石斧・打製石斧3（2は欠損）が発見されたという。

ここは『佐野遺跡範囲確認調査報告書』（第3次調査1975）の遺跡範囲から大きく外れた位置にある。『同書』の点で囲まれた外郭から170㍍、史跡公園から300㍍離れた位置にある。

「関東・東北の欠損品には火熱を受けて変色したものが目立つ。」（『日本考古学事典』2002石剣）として墓との関連もしるされているが、この発見場所の性格については、速断をさけ、今回は資料提示に止めておく。

18は石剣で緑泥片岩製、片面風化して黄白色、柄の中央に後でつけられた打痕があって凹んでいる。柄の部分一握りが作り出されている。

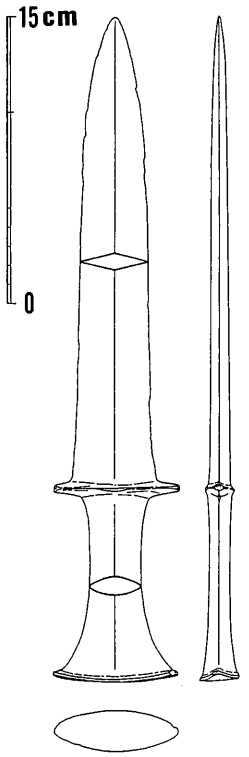
19は磨製石斧、斑礪岩製で定角式を成す。

第2節　中　　世

1　遺　　物

青磁片・珠洲焼（第11図16、17）

かなり摩滅した珠洲焼の摺鉢の口縁部破片1個が№30（A・1－2、りんご第一共選所・冷蔵庫南）から出土した。口唇部が外傾する形式でロクロ痕が顕著である。また、蓮弁文のある青磁椀破片1個が検出されている。灰オリーブ色の蓮弁の先が尖っている中国産の青磁で、ともに中世の遺物である。



第13図
出典『日本考古学』第16号　橋口達也（2003）
韓国　松菊里石棺墓出土の石剣（柳田康雄氏原図）

第３表　遺物の出土グリット表

図版番号	図番号	出土グリット	図版番号	図番号	出土グリット	図版番号	図番号	出土グリット
第５図	1	D－19・20	第６図	55	D－20・21	第７図	110	D－20・21
〃	2	D－19・20	〃	56	D－34・35	〃	111	D－20・21
〃	3	D－21・22	〃	57	D－20・21	〃	112	D－20・21
〃	4	B－19・20	〃	58	D－20・21	第８図	113	D－21・22
〃	5	D－34・35	〃	59	B－21・22	〃	114	D－20・21
〃	6	B－20・21	〃	60	D－20・21	〃	115	D－20・21
〃	7	D－20・21	〃	61	D－17・18	〃	116	D－20・21
〃	8	B－20・21	〃	62	D－20・21	〃	117	D－36・37
〃	9	D－22・23	〃	63	D－20・21	〃	118	D－34・35
〃	10	D－44・45	〃	64	B－21・22	〃	119	B－20・21
〃	11	D－20・21	〃	65	D－20・21	〃	120	D－21・22
〃	12	B－20・21	〃	66	D－45・46	〃	121	B－３・４
〃	13	D－34・35	〃	67	D－17・18	〃	122	D－20・21
〃	14	D－34・35	〃	68	D－17・18	〃	123	D－21・22
〃	15	D－34・35	〃	69	D－20・21	〃	124	D－20・21
〃	16	B－19・20	〃	70	D－21・22	〃	125	D－34・35
〃	17	D－21・22	〃	71	D－21・22	第９図	126	B－22・23
〃	18	D－34・35	〃	72	B－45・46	〃	127	B－20・21
〃	19	D－21・22	〃	73	D－20・21	〃	128	D－20・21
〃	20	D－20・21	〃	74	D－23・24	〃	129	D－20・21
〃	21	D－45・46	〃	75	D－34・35	〃	130	D－19・20
〃	22	D－21・22	〃	76	D－15・16	〃	131	D－20・21
〃	23	D－20・21	〃	77	D－15・16	〃	132	D－22・23
〃	24	D－19・20	〃	78	D－45・46	〃	133	D－20・21
〃	25	D－19・20	〃	79	D－34・35	〃	134	D－20・21
〃	26	D－17・18	〃	80	D－20・21	〃	136	D－45・46
〃	27	D－45・46	〃	81	D－22・23	〃	137	D－22・23
〃	28	D－19・20	〃	82	D－20・21	〃	138	B－20・21
〃	29	D－３・４	〃	83	D－15・16	〃	139	D－20・21
〃	30	D－21・22	第７図	84	D－20・21	〃	140	D－19・20
〃	31	D－22・23	〃	85	D－21・22	〃	141	D－23・24
〃	32	D－20・21	〃	86	D－20・21	〃	142	D－20・21
〃	33	B－20・21	〃	87	D－19・20	〃	143	D－20・21
〃	34	D－19・20	〃	88	D－19・20	〃	144	D－34・35
〃	35	B－19・20	〃	89	D－18・19	〃	145	D－17・18
〃	36	D－40・41	〃	90	D－34・35	〃	146	D－20・21
〃	37	D－45・46	〃	91	D－23・24	〃	147	D－40・41
〃	38	D－34・35	〃	92	D－20・21	〃	148	D－20・21
第６図	39	D－34・35	〃	93	D－21・22	〃	149	表採
〃	40	D－20・21	〃	94	D－34・35	第10図	1	D－20・21
〃	41	D－20・21	〃	95	D－21・22	〃	2	D－20・21
〃	42	D－20・21	〃	96	D－40・41	〃	3	D－34・35
〃	43	D－43・44	〃	97	D－20・21	〃	4	D－20・21
〃	44	D－20・21	〃	98	D－21・22	〃	5	B－９・10
〃	45	D－34・35	〃	99	D－19・20	〃	6	D－20・21
〃	46	D－20・21	〃	100	D－21・22	〃	7	B－１・２
〃	47・１	D－20・21	〃	101	D－20・21	〃	8	D－19・20
〃	47・２	D－20・21	〃	102	D－40・41	〃	9	D－40・41
〃	48	D－20・21	〃	103	D－20・21	〃	10	B－20・21
〃	49	D－44・45	〃	104	D－20・21	〃	11	D－21・22
〃	50	B－20・21	〃	105	D－45・46	〃	12	B－20・21
〃	51	D－20・21	〃	106	D－34・35	〃	13	D－19・20
〃	52	D－45・46	〃	107	D－44・45	〃	14	D－45・46
〃	53	D－20・21	〃	108	D－21・22	〃	15	D－34・35
〃	54	B－20・21	〃	109	D－20・21			

第Ⅳ章　結　　び

今回、出土した佐野遺跡の遺物について若干の考察を加えてみたい。しかし、紙幅の関係から縄文晩期後葉から弥生時代にかけての、私見で、要点のみとしたい。

永峯氏の『佐野』(1967) は、縄文晩期の亀ヶ岡式文化の影響によって、中部山地北よりの地域に「佐野式」と呼ばれる土器文化がどのように成立したか、という問題に重点がおかれている。したがって、発掘地点によって出土土器の様相が相違するのは当然としても、現在からみると、資料提示が十分ではないとの印象をうける。

一例として『佐野』第６表、佐野遺跡出土土器の年代的区分の工字文及びその類型で、皿形土器は、大洞Ａ式まで存続するとされているが、資料としては提示されていない。

これが縄文セミナーの会の2003年の資料調査につながったと思われる。しかし晩期中葉までの調査を主眼とされている。

この地方の縄文から弥生時代がどのように変革したか、興味ある課題である。現代は大綱としての編年は判明しているが、細部となると、今後に課せられた課題が多い。

工字文・変形工字文・浮線網状文の土器は大洞Ａ式に由来するとみられるが、この出土報告として、第８次『佐野』の報告書、田川 (1989) の所見がある。同書の第10図43は浮線網状文、同図44・45は変形工字文で、同図46は口縁が小波状をなしている。同図47も変形工字文の類とみられている。同図50は甕形土器で、くびれた胴部下から条痕文がみられるもので、氷第１群として分類されている。この50は１号土坑（遺跡公園南の県道交差点から中野方面に約９ｍの地点）の出土であった。

今回は浮線網状文（変形工字文）の土器が２点、(第６図76・77) がNo.24地点。浮線網状文の土器(第６図78)がNo.10地点。条痕文土器(第６図81)がNo.14地点。同（同図82）がNo.19地点。同（同図79）がNo.23地点で発見されている。以上の土器は、第８次発掘地の周辺からの検出である。

これらの土器は大洞Ａ式併行以降の土器で、変形工字文の出自と系統は、破片のため明瞭さを欠くが、本県の氷式併行前半の土器とみられる。

表面採集資料として提示した鉄剣形（仮称）磨製石剣を考察すると、石剣は晩期に関東から東北地方の太平洋側を中心として、盛行するとされているが、このような鉄剣形の石剣とよびたい類例は国内には乏しく、判断に苦慮されるところである。時期的には氷Ⅱ式段階の所産と推定され、佐野遺跡の存続の下限が広がった傍証となる。

文化は高きところより低きに流れるを、常とする。黒船来航以前は、九州方面を除くと大陸との文化交流の表玄関は、日本海側にあった。

管見すると山形県三崎山で青銅刀子が発見されている。(大貫1997)。この付近から縄文後期、晩期の土器が採集されているという。

この青銅刀子は内反りの環頭刀子とされ、形態的には鉄剣形磨製石剣の佐野出土例とはことなっている。

この青銅刀子の年代は、殷代後期と考えられている。三崎山例は中国安陽小屯殷墟出土の刀子に最も類似するという。環頭刀子その他の青銅刀子の大陸での東端の発見地は、鴨緑江下流の新岩里遺跡などで、この地域の青銅を伴う最も古い段階の遺跡である。年代はおおよそ前1000年前後の、殷末西周初の頃と考えられている。いうまでもなくこの青銅刀子と佐野の鉄剣形磨製石剣を結びつけるには多くの変遷段階や、新発見が必要である。

日頃、学究的な環境にいない筆者が、佐野例の類例を求めると、類似した石剣が朝鮮半島（韓国）松菊里石棺墓から出土していることが判明した。

ここからは遼寧式銅剣・磨製石剣（13図）・有茎の柳葉形磨製石鏃などに加えて、丹塗磨研壷がセットとなって、松菊里・鎮東里から発見されている(橋口2003)。佐野例とは剣身は菱形で鐔があり、柄の長さや、柄頭、把頭に共通点が認められる。

さらに橋口は、先にあげた韓国での出土遺物は、北九州の弥生早期から前期初頭の支石墓・木棺墓

等の副葬品として知られ、朝鮮半島における段階は、弥生早期から前期初頭の間にある。橋口の年代観によれば、紀元前５世紀末から紀元前300年前後の頃にあたる。朝鮮半島においては、いくらか遡るであろうが、それでも紀元前５世紀の中に納まると考えられる。

尚、橋口は従来からの弥生時代の年代観に問題がない立場で、国立民俗博物館がＡＭＳ法（加速器質量分析法）による高精度炭素14年代測定法の結果から提起した、弥生時代早・前期の年代が紀元前1000年から紀元前400年頃までにあるとした問題については否定的な見解をしめしている。

日本には青銅器と鉄器がほぼ同時に大陸から搬入されてと考えられている。潮見（1986）は「わが国の鉄器の出現は、福岡県糸島郡二丈町曲がり田遺跡出土の鉄器などからみると、鉄器の形状は明らかにしえないが、縄文時代の終末までさかのぼる（中略）、（ただちに鉄・鉄器の生産とはならない）中国・朝鮮から鉄器そのものが伝来するからである。」とされている。

さらに卑近の例として中野市（豊田村）笠倉出土と伝えられる弥生式磨製石剣（変形鉄剣形石剣）『信濃考古綜覧』下巻1957・図版135などに図示された遺物との脈絡や、関連が今後の残された問題である。

縄文時代の終末と弥生時代の始まりについて、林謙作（1986）は「亀ヶ岡と遠賀川」で次のように述べている。

浮線網状文土器の成立と分布圏の拡大は、弥生系の文物の伝播の経路を考える上で注目すべき現象である。浮線網条文土器は、中部高地から新潟平野にわる地域で成立し、急速に関東地方・東北地方南部まで分布圏をひろげる。浮線網状文土器は近畿地方でも報告されており、凸帯文土器にも弥生土器（第１様式中段階・新段階）にも伴っている。弥生土器の第二次分布圏は、浮線網状文土器の分布圏と完全に一致する。浮線網状文の社会の中で、農耕社会へ転換する準備が行われていることを暗示している。近畿地方から出土する晩期中葉以降の東日本系土器には、新潟地方からの搬入品や、模造品が圧倒的な比率を占めるようになる。それに引き続いて浮線網状文土器は、凸帯文土器にも弥生土器（第１様式中・新段階）にも伴出する。浮線網状文土器の成立する住民がいち早く近畿・東海地方の住民と接触して、弥生系の文物や技術を獲得していたことが、浮線網状文土器の分布圏の拡大と結びついているのであろう。

従来、縄文時代終末と、弥生時代初頭の土器の発見は、北信地方は少なく、遺跡の希薄性は認めるとしても、無人の荒野だったろうか。この地方の弥生式時代へどのように推移するのだろうか、まだまだ明確な答えが出てこない研究の段階と思われる。

中野市栗林には弥生時代中期に始まる大遺跡がある。この段階に到るまでの様相は地下に埋もれているのだろうか。

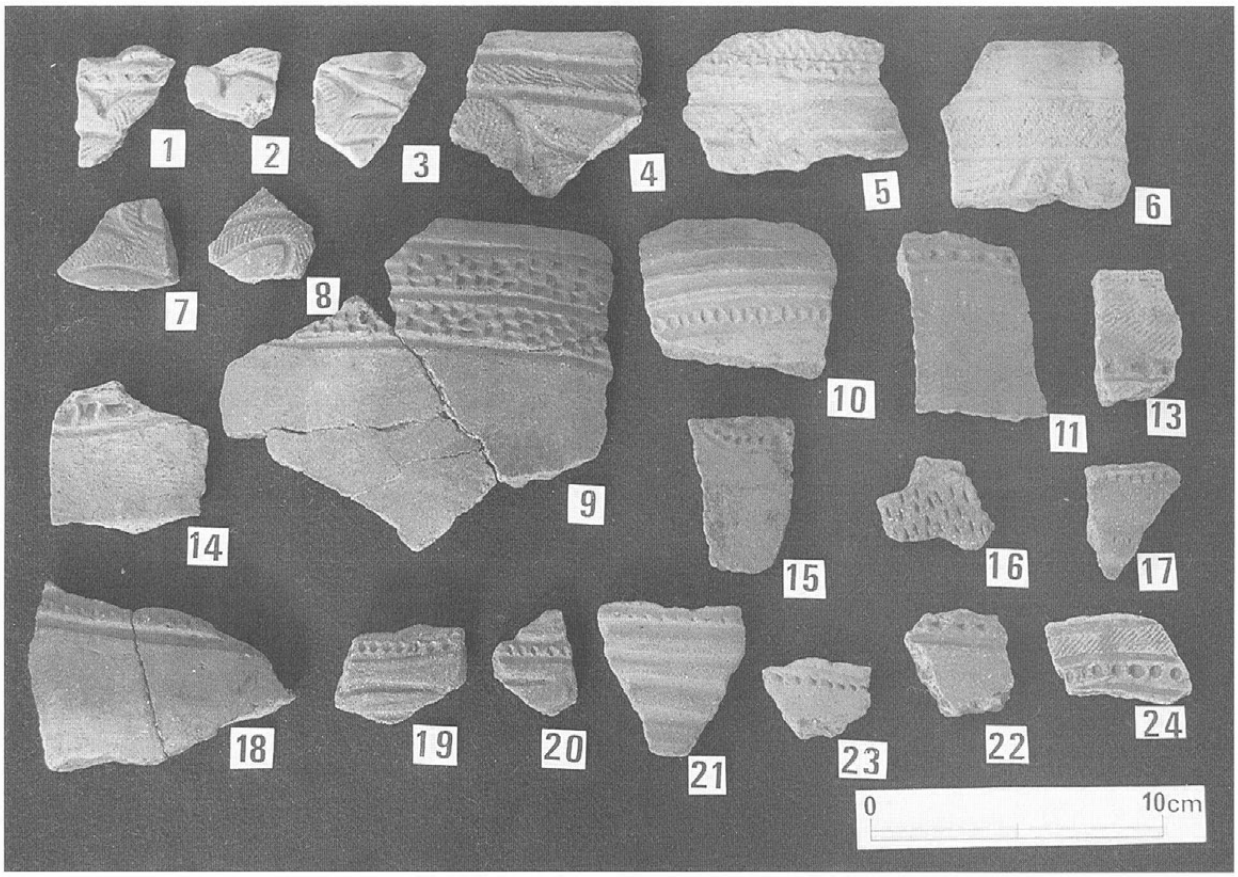
先年から弥生時代の開始が逆古すると報告されるようになった。一例をあげると神奈川県中屋敷遺跡　山本ほか（2005）の発掘調査では「土坑から弥生時代前期に相当する良好な一括遺物を確認した。（中略）考古学的調査と併せて各種の自然科学分析も実施した。樹種同定された炭化米・トチノキをＡＭＳ法で放射性炭素測定したところ、紀元前５世紀～４世紀の結果を得た。炭化材および土器付着物の年代測定の結果もほぼ同様であった。」（論文要旨から）

以上のように研究の進展により、弥生時代の開始が早まる傾向にある。したがって、北信地方の縄文の狩猟採集の時代から、弥生時代の農耕社会への変遷を知る上にも佐野遺跡の占める重要性がさらに確認されたといえる。

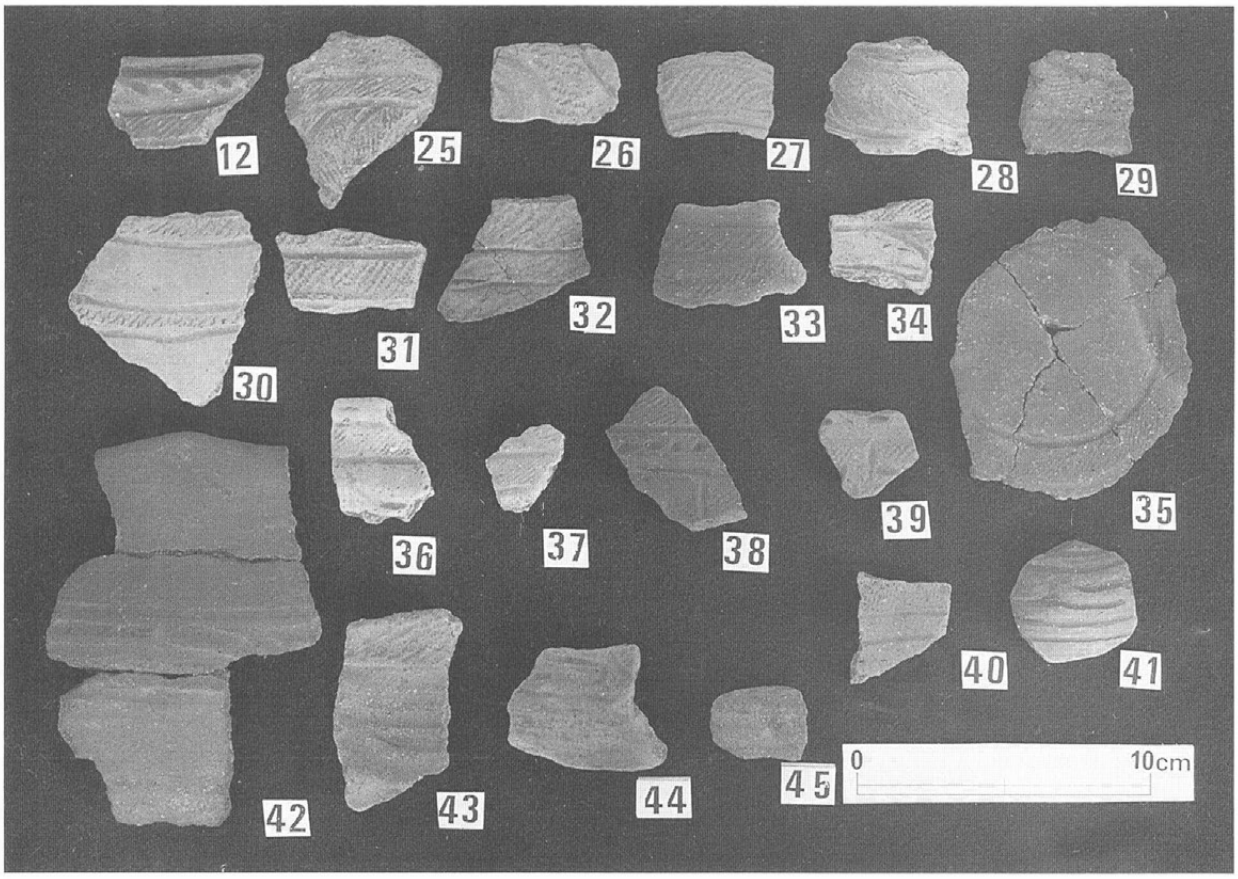
付記　永峯（1976）が切望された佐野遺跡出土遺物の展示施設の建設がいまだに実現していない。筆者は国の指定史跡を持つ町として、ほかの遺跡資料・民俗資料と併せて考古資料などの展示施設を考えていただきたいと考える。

図　　版

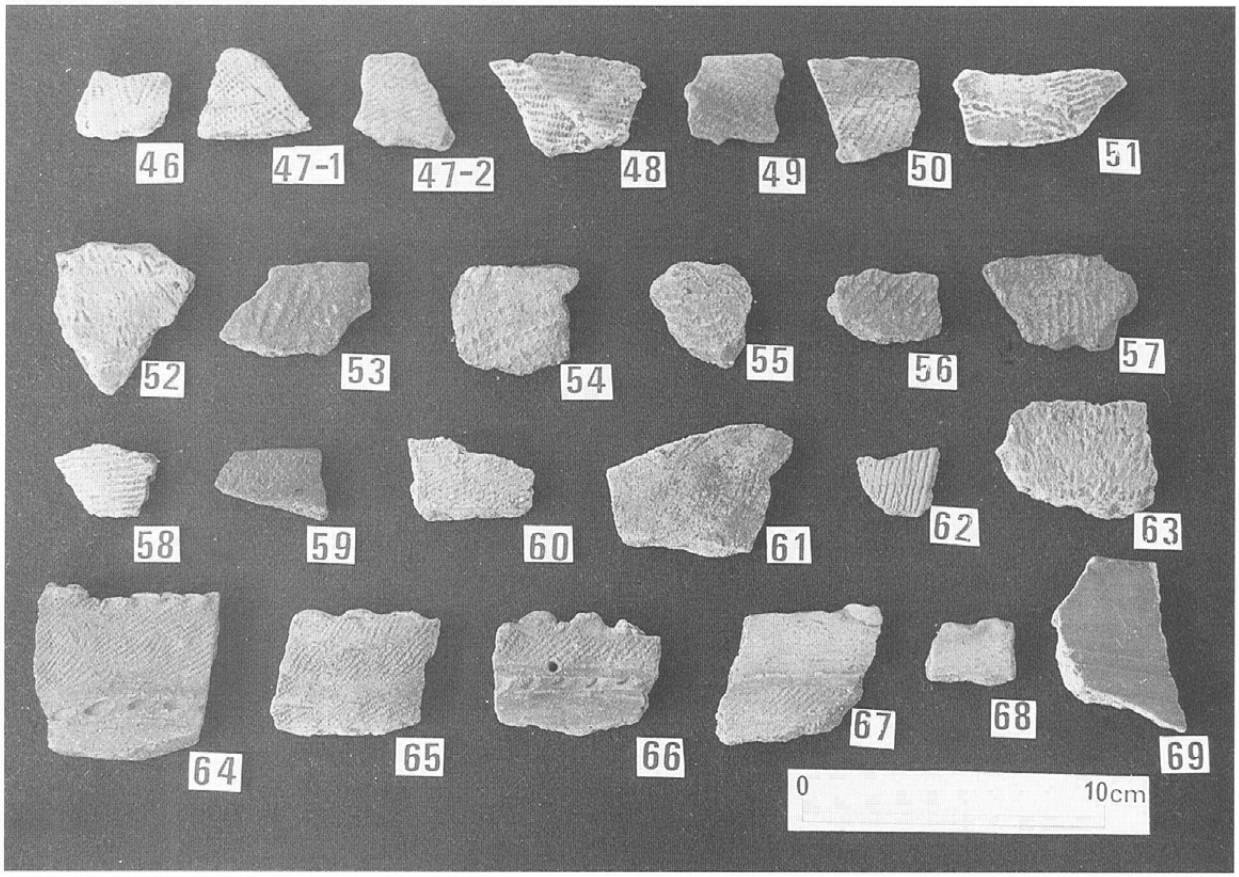
図版　1



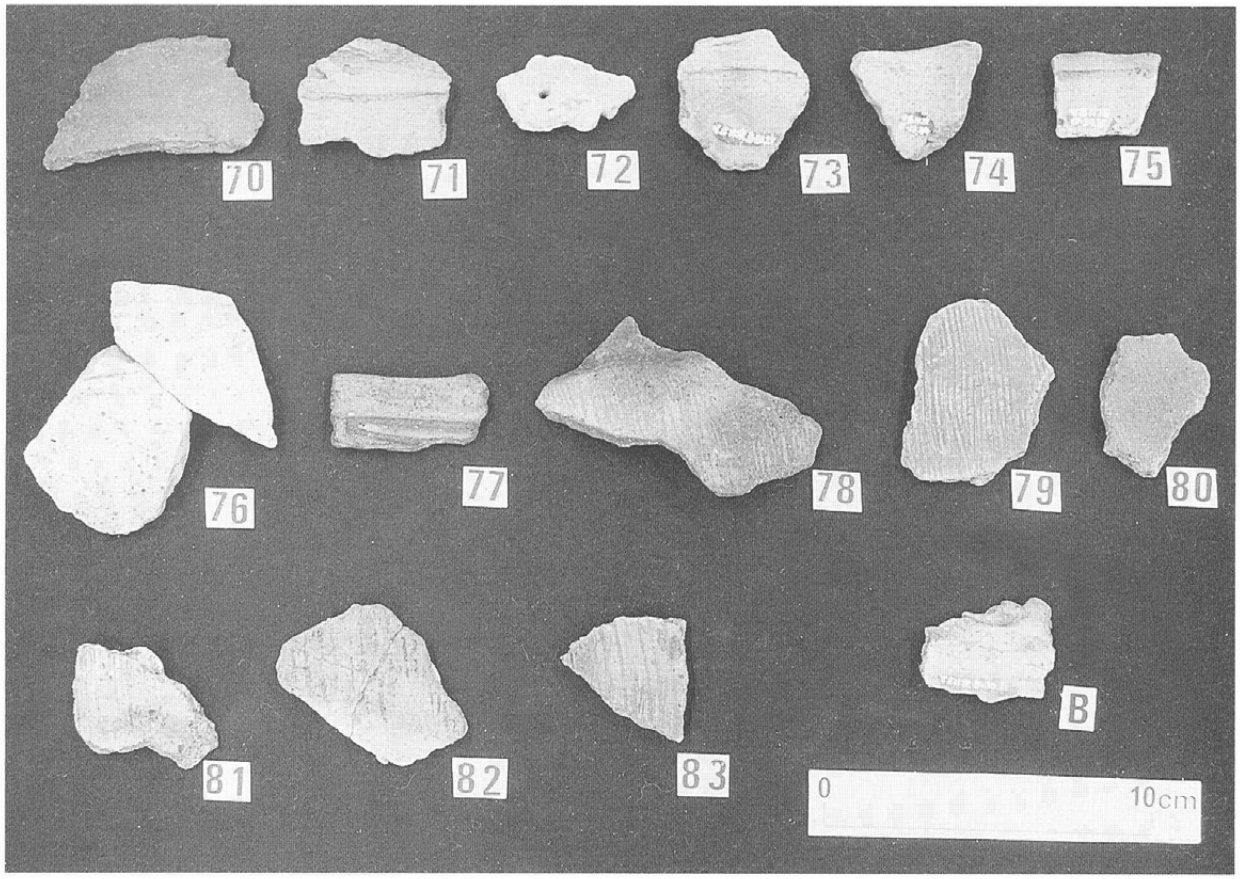
1．土器(1)



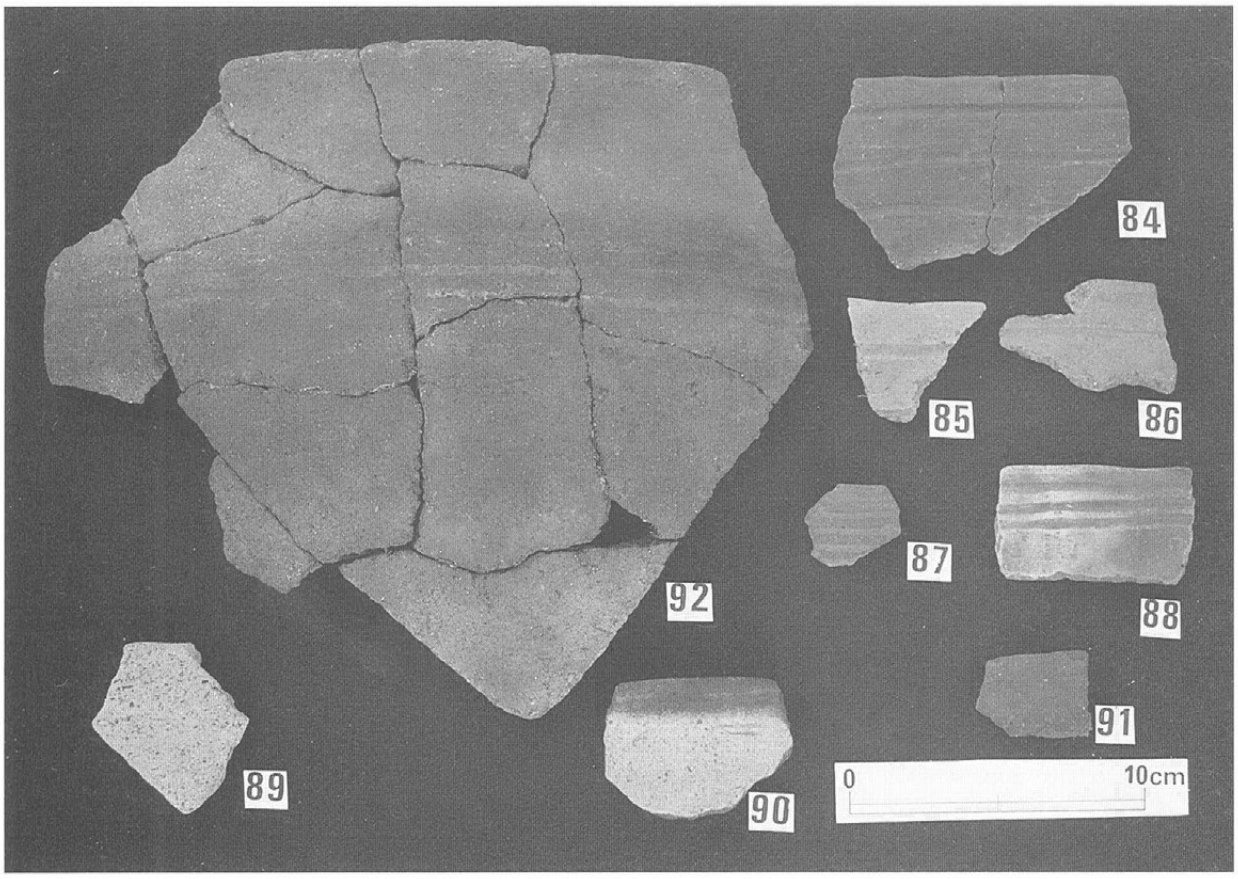
2．土器(2)


46
47-1
47-2
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
0
10cm

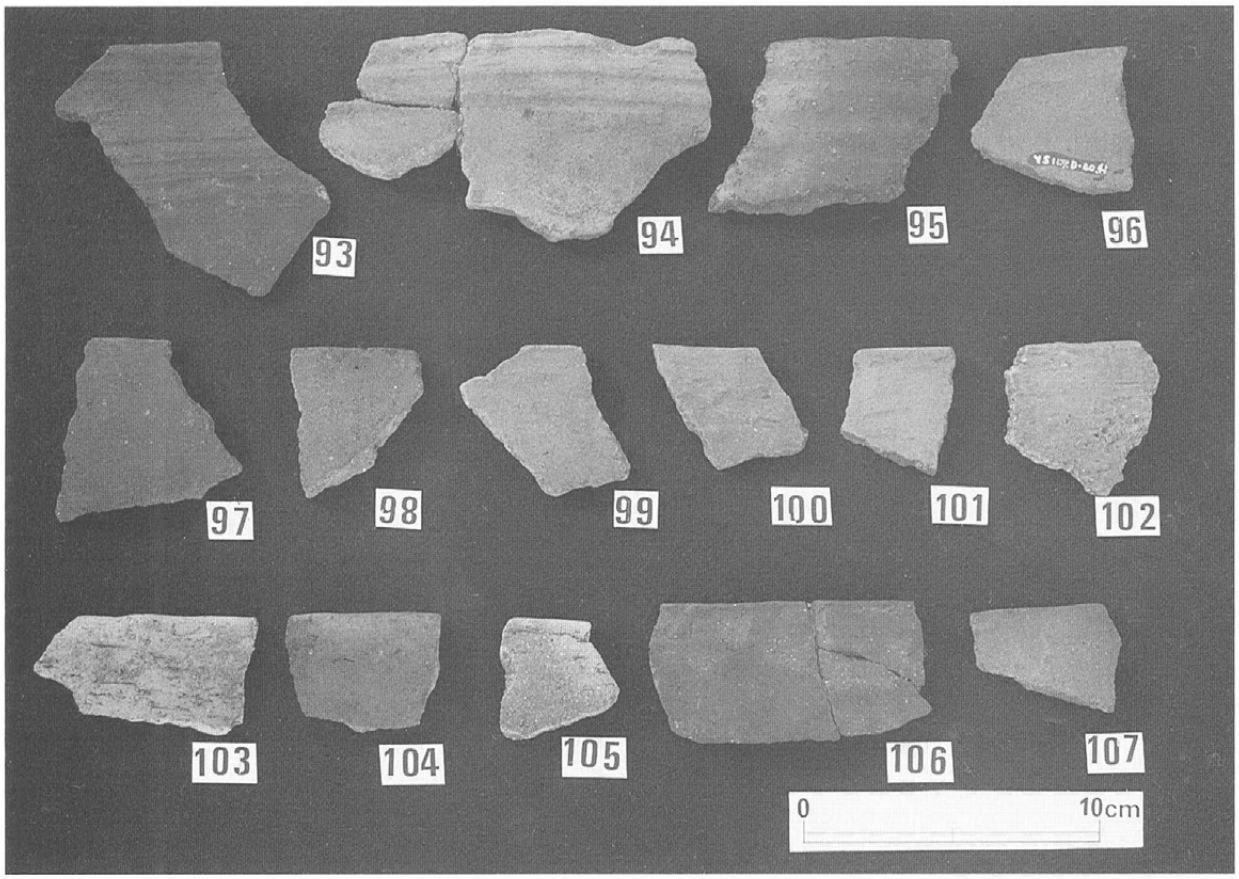
1．土器(3)


70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
B
0
10cm

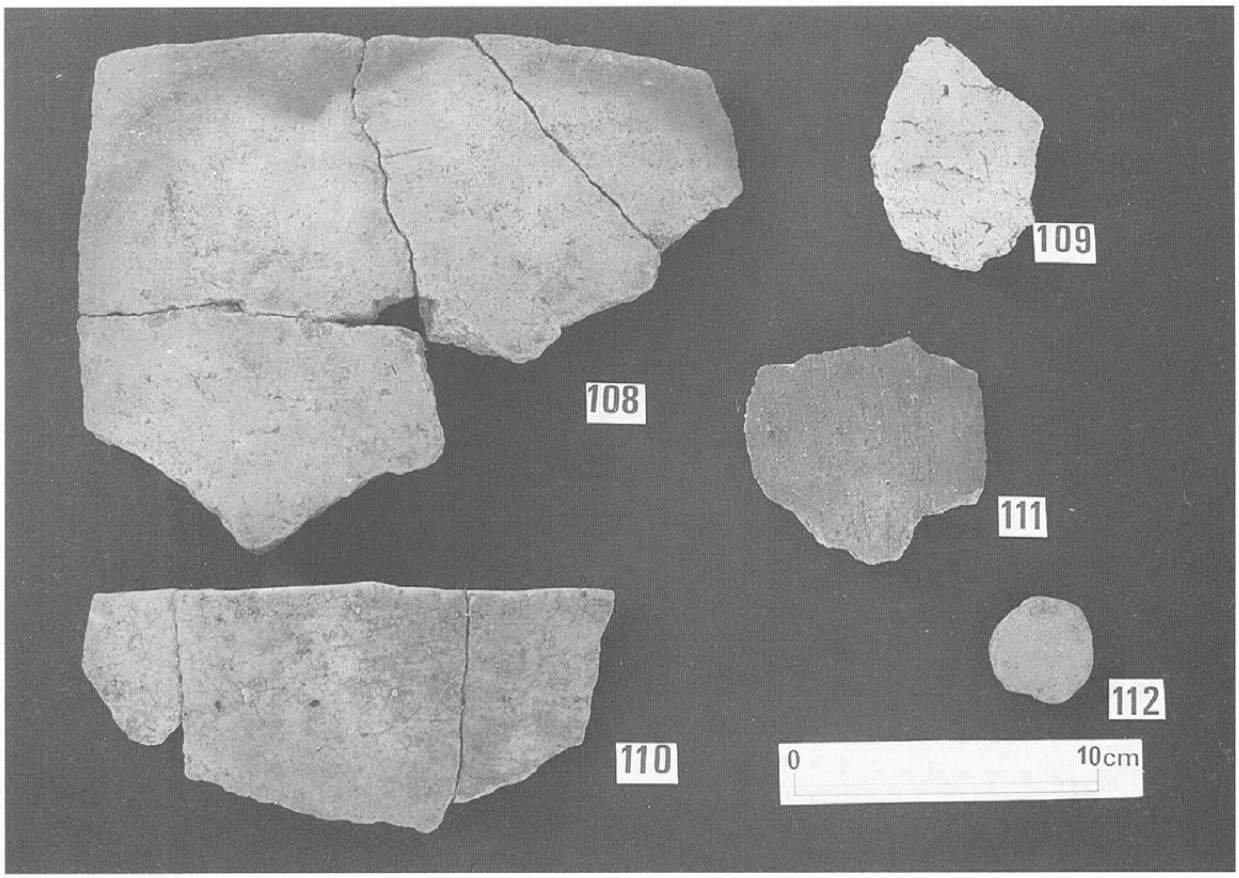
2．土器(4)


84
85
86
87
88
89
90
91
92
0
10cm

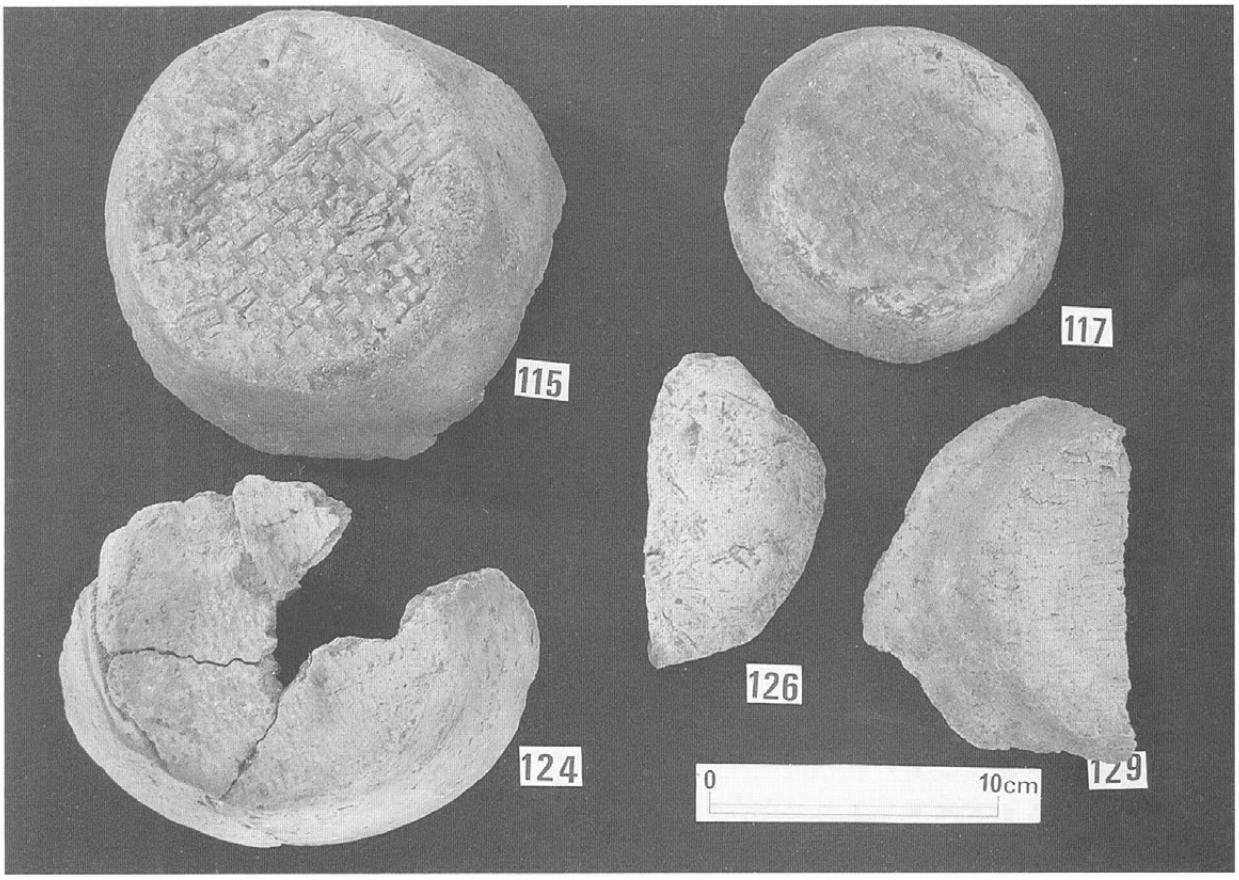
1．土器(5)


93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
0
10cm

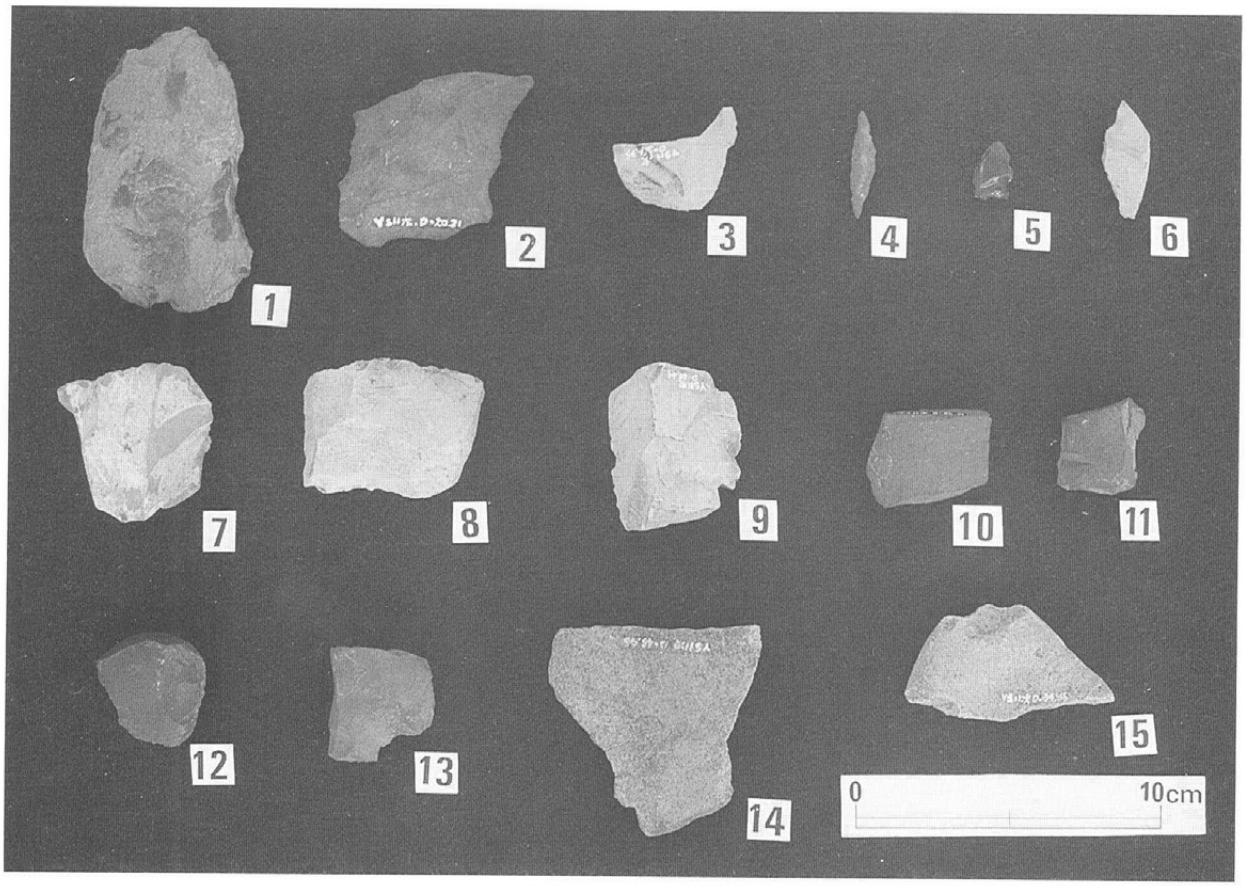
2．土器(6)



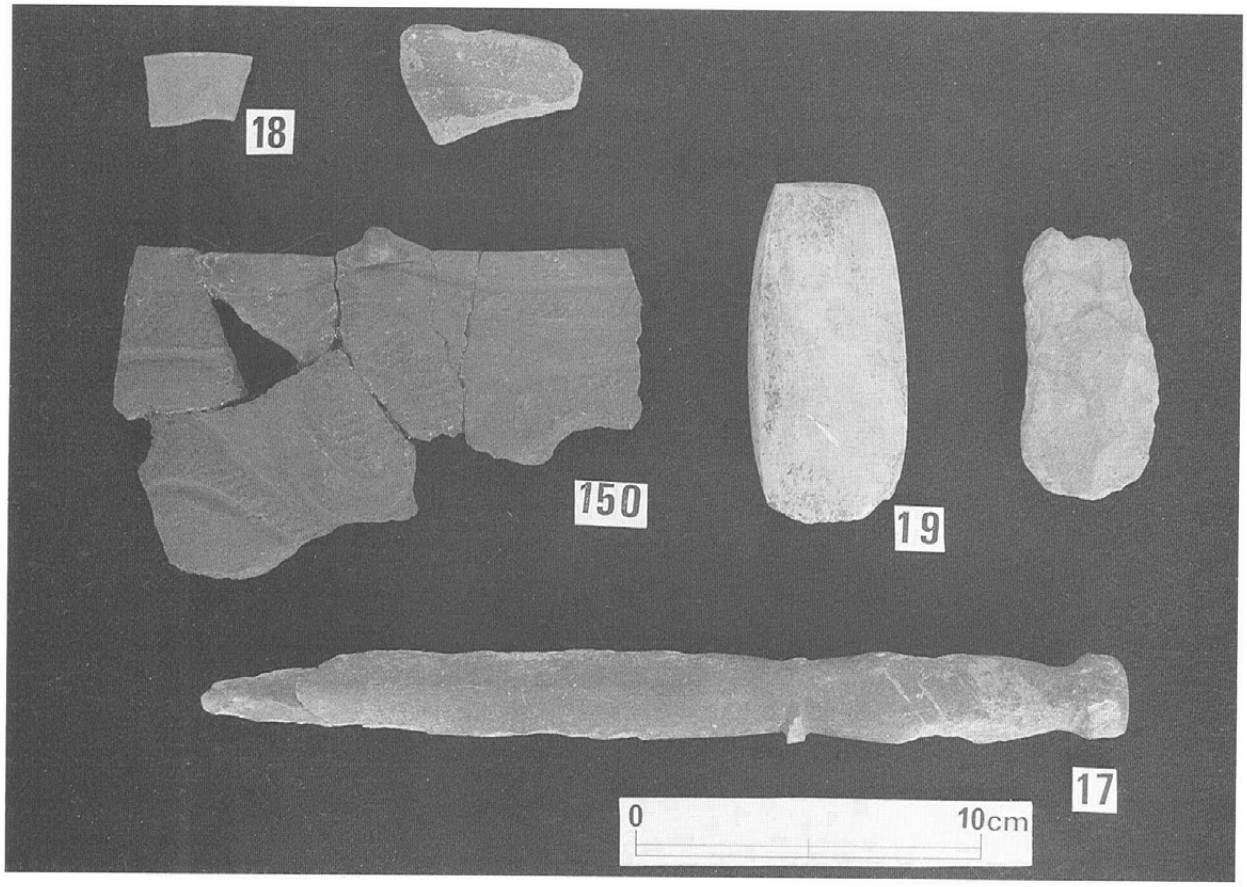
1．土器(7)



2．土器(8)



1. 石　器



2. 中世の遺物18と近在及び過去の表採遺物

引用文献・参考文献

1　山内清男　1930　所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末　『考古学』Ⅰ－3
2　八幡一郎　1932　信濃国下高井郡佐野の土器　『考古学』Ⅲ－3
3　小野勝年ほか　1953　下高井地方の考古学的調査　長野県教委　『下高井』
4　永峯光一　1955　千曲川沿岸地方における晩期縄文土器に就いて　『石器時代』
5　永峯光一ほか　1956　『信濃考古総覧』信濃史料第1巻下　信濃史料刊行会
6　桐原健　1962　信濃における縄文後晩期の所謂漁労文化に関する試論『信濃』Ⅲ－14- 7
7　永峯光一ほか　1967　山ノ内教委『佐野』（長野県考古学会研究報告書3）
8　永峯光一ほか　1969　氷遺跡の調査とその研究　『石器時代』9
（4・7・8　2005『永峯光一著作選集』に収載　信毎書籍）
9　山ノ内町誌刊行会　1973　『山ノ内町誌』
10　関孝一　1975　佐野式土器文化について　『高井』31号
11　永峯光一　1976　佐野遺跡について　『高井』51号
12　田川幸生　1977　佐野遺跡　『日本考古学年報』28
13　佐野の歴史刊行会　1979　『佐野の歴史』
14　大原正義　1981　北信濃山ノ神遺跡出土の土器について　『信濃』Ⅲ33―4
15　鈴木克彦　1981　亀ヶ岡式土器　『縄文文化の研究』縄文土器Ⅱ
16　永峯光一　1981　中部・北陸地方　『縄文土器大成』4晩期
17　設楽博巳　1982　中部地方における弥生土器の成立過程『信濃』34－4
18　大原正義　1982　佐野遺跡　『長野県史考古学資料編（二）主要遺跡　北・東信』
19　新潟県　1983　『新潟県史・資料編　1原始・古代一』
20　三田史学会　1984　『亀ヶ岡遺跡』－青森県亀ヶ岡低地性遺蹟の研究―（復刻版）
21　石川日出志　1985　中部地方以西の縄文晩期浮線文土器『信濃』37－4
22　檀原長則ほか　1985　土器・土製品　野沢温泉教委『岡ノ峯』
23　末永雅雄ほか　1986　『増補宮滝の遺跡』　初版1944
24　潮見浩　1986　鉄・鉄器の生産　岩波講座『日本考古学3　生産と流通』
25　林謙作ほか　1986　岩波講座　『日本考古学5－文化と地域性―』
26　綿田弘実・平林彰　1988　縄文晩期の土器　『長野県史考古資料編（四）遺構・遺物』
27　青木和明ほか　1988　『宮崎遺跡』－長原地区団体営土地改良区総合整備事業の伴う発掘調査報告書―
28　金子裕之　1989　安行式土器様式『縄文土器大観』4晩期
29　藤沼邦彦　1989　亀ヶ岡土器様式『縄文土器大観』4晩期
30　森嶋稔ほか　1990　『円光房遺跡』―長野県埴科郡戸倉町更級地区県営圃場整備事業に伴う幅田遺跡群円光房遺跡緊急発掘調査報告書―
31　戸沢充則ほか　1994　『縄文時代研究事典』
32　大塚達朗　1996　縄紋晩期研究の一断章―日下貝塚出土土器の再報告より－『画龍天晴』―山内清男先生没後25周年記念論集―
33　大貫静夫　1997　北方系刀子『考古学による日本歴史10・対外交渉』
34　渡辺明和　2000　『籠峯遺跡発掘調査報告書Ⅱ』新潟県中郷村教委
35　橋口達也ほか　2003　炭素14年代測定法による弥生時代の年代論に関連して『日本考古学』16

36　縄文セミナーの会　2004　『晩期中葉の再検討・記録集』（第17回）
37　山本暉久・小泉玲子　2005　中屋敷遺跡の発掘調査成果―弥生時代前期の炭化米と土坑群『日本考古学』20号
38　梅木謙一　2005　弥生時代研究の動向『日本考古学年報56』2003年度版

「佐野遺跡の発掘調査報告書」は別記

山ノ内町の埋蔵文化財発掘調査報告書　発行　山ノ内町教育委員会

1　永峯光一ほか　『佐野』（長野県考古学研究調査報告書３）　（縄文晩期）1967
2　金井汲次ほか　『上条遺跡調査略報』（縄文中期）　（縄文中期）1967
3　金井汲次ほか　『第２次上条遺跡調査』（縄文中期）　（縄文中期）1968
4　永峯光一ほか　『佐野遺跡範囲確認調査報告』（第３次発掘）　（縄文晩期）1975
5　金井汲次ほか　『第４次佐野遺跡緊急発掘調査報告書』　（縄文晩期）1977
6　金井汲次ほか　『第５次佐野遺跡緊急発掘調査報告書』　（縄文晩期）1978
7　田川幸生ほか　『第６次佐野遺跡緊急発掘調査報告書』　（縄文晩期）1981
8　田川幸生ほか　『伊勢宮』　（縄文後期）1981
9　金井汲次ほか　『佐野遺跡第７次緊急発掘調査報告書』　（縄文晩期）1982
10　檀原長則ほか　『上林中道南遺跡発掘調査報告書』　（縄文草創期～平安時代）1985
11　田川幸生ほか　『佐野遺跡第８次緊急発掘調査報告書』　（縄文晩期）1989
12　金井汲次ほか　『佐野遺跡第９次緊急発掘調査報告書』（未刊）　（縄文晩期）1990
13　金井汲次ほか　『佐野遺跡第10次緊急発掘調査報告書』　（縄文晩期）1993
14　檀原長則ほか　『島崎遺跡試掘調査報告書』　（縄文中期）1994
15　檀原長則ほか　『上林中道南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　（縄文草創期～平安時代）1995
16　檀原長則ほか　『上林中道南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　（縄文草創期～平安時代）1996
17　檀原長則ほか　『上林中道南遺跡試掘調査報告書Ⅳ』　（縄文草創期～平安時代）2003
18　檀原長則ほか　『上林中道南遺跡発掘調査報告書Ⅴ』　（先土器（旧石器）～平安時代）2004
19　檀原長則ほか　『佐野遺跡第11次発掘調査報告書』　（縄文晩期）2006

佐野遺跡発掘報告書抄録

ふりがな	さのいせき
書名	佐野遺跡11次
副書名	上・下水道工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	第19集
編集者	檀原　長則
編集機関	山ノ内町教育委員会
所在地	〒381-0498　長野県下高井郡山ノ内町大字平穏3352-１　☎0269-33-1102
遺跡所在地	長野県下高井郡山ノ内町佐野区畑中ほか
遺跡県登録番号	№6502
遺跡位置	緯度36°43′44″　経度138°24′36″
遺跡標高	597～606m
調査期間	平成17年７月19日～12月６日
調査面積	581.6㎡
調査原因	上・下水道工事に伴うもの
種別	包蔵地
主な時代	縄文時代晩期
主な遺構	
主な遺物	縄文土器・石器
調査機関	山ノ内町教育委員会

佐野遺跡XI

——上・下水道工事に伴う発掘調査報告書——

発 行 日　平成18年３月31日

発 行 者　山ノ内町教育委員会

〒381-0401 下高井郡山ノ内町大字平穏3352番地１

電話　0269－33－3111

印 刷 所　ほおずき書籍株式会社

〒381-0012　長野市柳原2133－５

電話　026－244－0235